HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大衆における自己形成の思想：サークル運動の現代的意味
Author(s)	長浜, 功
Citation	北海道大學教育學部紀要, 18, 133-165
Issue Date	1971-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/29059
Type	bulletin (article)
File Information	18_P133-165.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

大衆における自己形成の思想

——サークル運動の現代的意味——

A Study of Mass Thought for the Circle Movement Theory

長　浜　　功
Isao NAGAHAMA

梗　　概

最近サークル運動の停滞ということがいわれている。またサークル運動の復興を望む声もあがっている。確かにサークル運動は今日いろんな意味で停滞し，混迷している局面を抱えている。昭和 30 年前後を一つの頂点としたわが国のサークル運動がもっていた意味と性格をとらえることは，現段階では不必要というより，むしろ積極的な意味をもっている。小稿はそうしたサークルの内在，外在的問題について再吟味を行ない，あわせてサークルを大衆の思想として再発掘するという視角から検討している。

展開はほぼ三つの方向からなされる。第一はサークル理論の発生と変容を考察していく流れの中で今日的位置を調べていく方向である。ここではサークルを大衆の土着の思想の拠点としての位置づけが吟味される。第二はサークル運動の展開過程の吟味と実践の具体的分析の方向である。ここでは大衆がどのようにしてサークルに参加していったか。とくに自己形成を進める一つの拠点として，参加主体がどのように実践に関わっていったか。サークル運動が大衆に寄与した，実感から科学的認識への転化がサークルでどの程度可能になり，現在はどの水準にあるかということを検討した。第三は，サークルと大衆との関係についての理論的検討の方向である。ここではサークル理論と大衆の参加契機とその発展の問題を中心に扱っている。

以上のアプローチの結果，戦前サークル理論と戦後サークル理論の整合と不整合の構造が明らかになり，二者択一の不可能なこと，またサークルの原型は大衆の土着の思想(未体系の思想)に求められ，そこにおける実感主義の克服が重要視される必然性も明らかとなった。その過程はうたごえ運動，生活記録運動の具体的分析に示されているが，今一つ矛盾の無風地帯における大衆の科学的認識の方法について，人生雑誌と草の実会の具体例から解明しようとした。

サークル運動が，小集団活動ではだめで，サークルでなければならなかった必然性が小稿を通じて明らかにされると思うが，小集団理論とサークル理論についての検討も部分的ではあるが試みている。サークルについても小稿は大衆との結びつきという視点からとらえようとしたが認識の問題，組織論の問題さらに集団論としての吟味については後に残される課題となった。

目　　次

問題の所在
第1章　サークル運動理論の原点
　第1節　サークルの原型
　第2節　戦前のサークル理論
　第3節　戦後のサークル理論
　　1.　対ファシズムとしての思想
　　2.　新しい人間の結びつきとしての思想
　　3.　大衆社会における小集団論
　第4節　サークル理論の連続と断絶
第2章　戦後サークル運動の分析
　第1節　サークル運動の概況
　第2節　二つの運動における具体的分析

1. うたごえ運動
2. 生活記録運動
第3節 サークルと学習
第3章 大衆の思想としての理論と構造
第1節 サークル理論の今日的吟味
第2節 サークルにおける密着の論理
第3節 自主性・独自性をめぐる論議
第4節 実感主義の克服へ
1. 人生雑誌
2. 婦人の自己形成
むすび

問題の所在

これから取扱っていく問題はわが国における大衆運動の特異な一翼を担ったサークル運動理論の検討である。実にサークルは日本の大衆の中に広く浸透している。おそらくサークルほど広汎な大衆を文化の創造，階級的自覚の運動に包みこんだものはかってなかったといっても過言ではない。しかしまた反面，多数の大衆の中に息づき，動きはじめることによってサークルは好むと好まざるとにかかわらず，その体質の変容を迫られることになった。その動きとパラレルにサークル理論にも種々の変化がみられるようになり，しだいにサークルは再び本来的な機能と役割を問われるようになっている。

いうまでもなくサークル運動は日本の大衆が生みだしたプリミティヴな小集団である。いいかえるならば日本の大衆の中の土着的な体質とそこからにじみ出てくる思想がサークルを育ててきた。したがってサークル運動理論の考察は，ただ単に原理内在的な問題構造を解きあかすだけに終ってはならない。それはあくまでも日本の大衆の中に位置づけられてとらえられていかなければならない。これまでのサークル運動とその理論に関する研究ではともすればサークルの原理内在的な面に力点が置かれるか，あるいは印象的批評の域を少しも出ないもののどちらかに分けてしまう事ができるような欠陥を多分に含んでいたように思う。

さらにサークル運動の実践主体から，サークル運動の発展のためにも一日も早い理論化が望まれていたのに対し，建設的・生産的提言は理論家・知識人の側からは少しもなされることなく，実践主体の深い失望を買うこととなった。心理学・社会学者による小集団研究の動向はサークル運動に寄与するかにみえたが，結局は機能主義と解釈原理に転化してしまい，次第にサークル運動の理論化をあきらめざるをえない状況になってしまったのである。

こうした諸問題について一定の整理をしておく作業は，サークル運動の現在と未来にかかわって是非手を加えておくべきものと思うが，小稿ではそれらのうちつぎの3点に重点を置いて解明を試みていきたい。

(1) サークル理論の系譜の整理……このことによってサークルのもっている本来の固有な機能と性格をたどることができるはずである。

(2) サークル運動と大衆の関係……サークル運動の発生の背景についてはいろいろな説がある。しかしどんな解明の方法をとろうともそれが実践主体である大衆とのかかわりを欠落させていては何にもならない。

(3) サークル運動の吟味……サークルを理論的に追求していく場合，理論ばかりをいくら集積し，そこから一定の結論を出そうとしても無意味である。なぜならサークルは静的・解釈的存在ではなく，動的・実践的存在であるからである。したがって具体的かつ典型としての運動を点検することが，サークル理論の妥当性ないし科学性を計測するうえで大切である。

以上の3点はそれ独自の柱として述べるという方法でなく，各章の中で最も有効と思われる箇所で触れていくという方法をとることになるであろう。ただ一言つけ加えておけば第3項の「サークル運動の吟味」はあくまでもサークル理論を構築する際の素材であって，その分析が中心となるのではない。これは冒頭にも述べておいたとおりである。したがって「サークル運動」と「サークル理論」の区分を厳密にやることよりも「サークル運動理論」の探求をすすめるという視座のほうを選択するわけである。もとより「運動」と「理論」の次元は不即不離であるが，ある段階では〝区分の論理〟が成り立つこともまた自明である。

第1章 サークル運動理論の原点

第1節 サークルの原型

「サークル運動」と「サークル理論」とを区分して論述する際の最初の足がかりは，サークルの原型をさぐること，その理論の成立史をたどることである。つまりサークルの原型を求める方向とサークル理論の発祥を求める方向とは明らかに時系的な開きをもっている。いうま

でもなくサークルは理論より以前に生み落されている。サークル理論が提起されるのはそのずっと後のことである。ここではサークルの原型をさがし出すことよりも，サークル理論の発祥に焦点をしぼってみていくことにしたい。というのは，サークルの原型をたどることがさほど生産的とは考えられないからである。サークルがいつ，いかなる形で発生したかについて詮索する場合，それが価値をもつものは，サークルの原理内在的な性質にかかわる保障のある限りにおいてであるが，現段階では中世の「ウタガキ」にサークルの原型を求めたり，(1) あるいはまた大正年代の学生たちによる社会科学の研究や読書会に求めたり，(2) そういうことはおよそ非生産的である。こうした古物商的発想によるサークルの原型探求は意味がないばかりでなく，サークル自体の本質をも歪曲させる結果になりかねない。

よくいわれるように，サークルというのは日本的風土の生んだ土着の大衆の集団である。それゆえ，小集団の心理学的・社会学的定義はこの際殆んど有効でない。(3) 心理学で集団をあたってみると「ふたり以上の人間または多くの生物が集って心理学的場をつくっており，メンバーが相互関係をもっている場合」で，かつ「ふたり以上の人間の集まりで，組織をもっているもの」という具合になっている。(4) 一般に心理学者による集団の定義は多様でかつはなはだ不誠実であって「諸君がどの定義を選ぶかは，諸君の目的のいかんによって決まってくる」(5) のである。また社会学においても集団をとらえる視点は学者によってまちまちであるが，たとえばオルムステッドの定義によると「集団とは相互に接触し，お互いのことを考慮し，かつある意味をもった共通性 (commonality) を意識しているような多数の個人」(6) というように，われわれのサークル概念の適用にはあまりにもかけ離れているのである。それゆえ，社会学者のサークルに対する見方が日本的土着の思想からはずれたかなり焦点のボケたものになるのは，後に述べるようにあながち無理はないということにもなる。

サークルとは何かということを厳密に考証する事もまた生産的論議とはいえない。強いて小集団としてのサークルの基本的構造をあげるならば，

(1) 世代，性別，階層，党派を成員の役割地位の基準としない

(2) 成員相互に対等な権利が不文律のうちに認められている

(3) 人間的情動表出が最大限に許容され，自己疎外と集団的に対峙する機能を持つ

(4) 一定の目的をもち，成員はそこに共通の目的志向を有している。成員はその目的を最大公約数として各自の特有なしかたによって自己形成をめざす

(5) 成員の数は一定ではなく，相互に知り合える交流が可能な単位によって構成される

かなり粗っぽいが以上5項目に集約されるであろう。しかし，実際の話がこうしてサークルの基本構造となりを提示してもさほど役に立たないのである。なぜなら，これでは日本的風土の土の匂いが少しも出ていないからである。サークルを論ずる際にこのことを見落させては社会学や心理学の定義と五十歩百歩である。

サークルの原型はいったいどこにあるのか。日本の大衆の生み落したサークルの風土的・土着的基盤はいったいどこに求めることができるであろうか。実はこの問いに答えることが，現在のサークル運動の問題を解明する足がかりになるのである。それを「ウタガキ」や「社会科学研究会」といった外形的組織にいくら求めても無駄であろう。

その一つの手がかりは大田堯の『農村のサークル活動』という著作に求めることができる。同書の中で氏はサークルの原型を「村のたまり場」に求めた。農民の暮しに欠かすことのできなかったグチやニュースや自慢話の咲く所，それはどんな山奥の農村にもあった。氏神さまの石段，橋げたの一角，小川のほとりの洗濯場などなど，どこでもよい，農民の集まる場所に制限はなかった。封建制度の重圧の下での唯一の吐け口としての「たまり場」は農民がくつろいで自由のひとときをむさぼる憩いの場であった。

「このたまり場は，誰から与えられたというところではなく，農民が自分たちでつくり出し，かちとってきた自由な空間なのです。土地の私有も許されず，徒党もきびしく禁圧された幕府政治のもとでも，たまり場は農民たちのものでした。そういう政治のもとでの重く暗い家や部落のくらし，義理としきたりにがんじがらめにされたくらしの中で，たまり場は生命の洗濯場，オアシスであったのです。たまり場は転々と場所をかえてきました。そこでの語りてたちも入れかわり立ちかわりしました。しかし連綿としてやむことはありませんでした」

「たまり場では，『バカ話』『ヒソヒソ話』が公然とあらわに語られるのです。そういうなかで，農民の間に生まれた数多くの民話が語りつたえられ，村に生きるものの哲学，処世術も身につけられていくのでしょう。長い停滞としきたりの中にとじこめられてきた部落や家のくらしの中で，このたまり場だけは，創造的で，変化にとみ，ユーモラスで，自由に考えるということ

の行われるほとんど唯唯一の場所だといえないでしょうか。人間らしさがほとんど圧殺されているといってもいい村のくらしの中でここだけがほんがりした人間味をとどめたただ一つの空間だったともいえるのです」[7] (傍点原文)

大田はこのあと，サークルの原型としての「村のたまり場」を強調するあまり，サークルを楽天的・観念的にとらえてしまう誤まりをおかすが，[8]サークルの原型(氏の表現では「サークルの前史」)をここに求めることでは私と全く一致する。こうしたサークルの原型は柳田国男の労作にもみることができる。「今でも形ばかりは山家などに残って居るか知らぬが，夜話と称して老人は茶を呑みに，若盛りの男女は夜なべを持寄って一つ明りの下で群れて夜を更すのは，もとは一種独特の学校であった。此間に於て言葉を覚え物の名を知り，更に常識と名づけられる考へ方や，農民相当の作法と義理，こんなものが自然に教へ込まれる上に，文章に現はすことも六つかしいやうな気持心持，人は何を悦び何を非難するかと云ふ風な，只尋ねても答を得にくい問題が，それと無く実例に由って解説せられた」[9] ここに述べられているのは大田のいう「たまり場」の復元である。人間らしさの回復を実現する場として，われわれの祖先はこういう形で集団をつくりあげていた。その集団の雰囲気については，もう少し同氏の説明をかりたほうがよいと思う。

「所謂夜話の順序は，どの地方でも大凡同じであった。最初に顔を見たときは今日の昼間の出来事から口を開く。何を見たか何々を聞いたかというのが糸口で，いいやと言ふ者が一人でもいれば，中で一番の話上手が皆に見られながら出来るだけ印象強く転末を叙する。しかたや身振があって一同が軽く嗤ひ，三分から五分までの沈黙が来る。すると考へて居た老人の一人がおらの若の若い頃にもと言って，稍々類似の話をし出す。(中略) 最後には大話などと称して少し下品な即ち嗤はせる題目が出て来る。是にも役割があって比較的だまって，今まで聴いて居たやうな男が之を勤める。それで一同が腹の皮をよって，一度は是非とも声高く，揃って嗤はぬと切りがつかぬ。さうするともう御休みと，そちこちに捨てぜりふや明日の打合せのやうなものが聞えて，散り散りの下駄の音となるのである」[9]

農民のこうした集まりは，たんなるウサばらしの他に「温味のある活きた学校」(柳田国男) という役割をもはたしていた。それは若者組，若衆組とはまたちがったインフォーマルな集団であり，われわれが今日のサークルの原型をここに求めても少しも無理はないと思われる。いつ，どこに，なんという名称の，どんなサークルができた，ということは問題にならない。サークル運動の停滞がいわれる所から，われわれの課題はまず出発点を再吟味するということである。その意味で，以上のような原型をあらためて確認することが極めて大事ではないかと思われるのである。そういう精神的風土の中でサークルは大衆組織の一つの領域を創造する足がかりをつかんでいた。このことを忘れて，サークル理論の発生のみをいくらほり下げてみても，ますますそれは大衆から遊離していくにすぎないであろう。

第2節　戦前のサークル理論

サークルの原型についての諸説はいろいろ分かれるがサークル理論に関する限り，意見は一致している。すなわち蔵原惟人が官憲の目をくらますためにさまざまなペンネームで 1930 年代に発表した次の論文の中に，戦前サークル理論の展開をみることができるというのは既に定説となっている。

(1) 古川荘一郎「プロレタリア芸術運動の組織問題」——工場・農村を基礎としてその再組織の必要」『ナップ』1931年6月号 (のち『蔵原惟人評論集』第II巻　新日本出版社 1967年に所収)

(2) 川口浩一「芸術運動における組織問題のより高い発展のために」『プロレタリア文化』1932年 (同上)

蔵原は 1930 年にモスクワで開かれたプロフィンテルン第5回大会の組織問題に関するテーゼ,[10] および同大会アジ・プロ部協議会テーゼ[11] から新しい大衆組織づくりを提唱したのであった。

「日本の芸術運動は，この際，特に最も厳格な，大衆的な自己批判によってさらに新しい時代に踏み入らなければならない。しかも日本のこの運動には，この決議がその現存を前提としている組織上の問題における重大な欠陥が存在していることを，我々は今にいたって見ることが出来るのである。(中略) 重大な欠陥とは何か？　一言で言えば，わが国の芸術運動が，これまで，真に大衆的なプロレタリア的な基礎を有しなかったということである。ナップ所属の作家同盟なり，劇場同盟なり，美術家同盟なりまた映画同盟，音楽家同盟なりが，企業内の労働者にその組織的基礎を持っていなかったことである」[12] (傍点原文)

こうした前提はいうまでもなく前衛政党の党勢拡大を基調としながら，大衆のプロレタリア化を進めていこうという意図をもつものであった。そのためにも「企業の中に労働者自身の文学グループ，演劇グループ，美術グループ，音楽グループ等 (勿論この名称は必要に応じて変化する) を組織すべきである。」[13] という事が必要であ

ると蔵原は説いた。これらのグループには二つの任務が与えられていた。すなわち

(1) 芸術的任務――「ブルジョアおよび社会フアシスト的芸術の影響下にある労働者を，プロレタリア芸術の影響下に獲得すること」

(2) 政治的任務――「何等かの芸術的技術をもっている労働者に対する技術的，イデオロギー的指導」

であった。

こうした背景にはいま一つナップ（全日本無産者芸術連盟）の組織上の停滞と運動上の限界を越えるために，大衆の組織化の方法が真剣に検討されねばならなかったことがあげられる。そのためにもこれらの組織（＝サークル）は「極めて自由かつ大衆的なものでなければならぬ」とされたのであったが，「企業内における芸術組織は，それが芸術的組織であると同時に，常に政治的組織である」ことのほうがより強調されたから，サークルが大衆自身の望む形で生まれなかったのは，けだし当然であったかもしれない。エロ・グロナンセンスが流行語化した（昭和5年）この時代の大衆の文化的水準は確かに頽廃文化からの脱皮を望んではいたが，いっぽうで大衆は「酒は涙か溜息か」「丘を越えて」を歌ってうさばらしをやっていたのであった。蔵原の芸術理論と大衆の文化水準とはあまりにも落差がありすぎた。

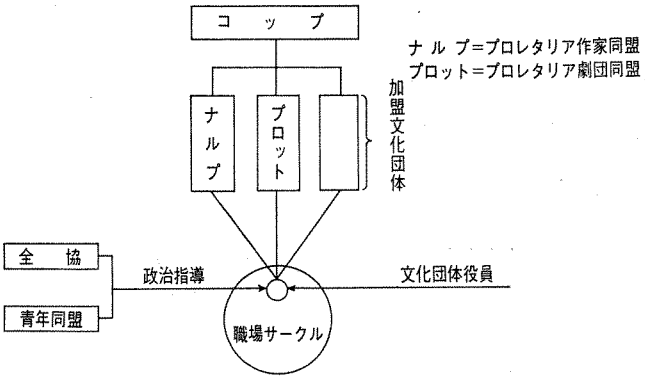
いうまでもなく蔵原のサークル論は工場労働者の芸術的・政治的組織化にかなりの力点がおかれている。むしろ工場労働者をナップやコップ（日本プロレタリア文化連盟）の各サークルに組織することによって，大衆の文化的要求を満たそうとした，といってよい。すなわち第一に企業内の労働者という限定，第二に芸術サークルと大衆の文化水準の大きな落差，この二つの条件が，新生サークル運動にもたらしたのはプラスよりもマイナスのほうが多い。なぜなら，大衆のプロレタリア化（＝階級的自覚化）をすすめるためには単に企業内という小さなワクにこだわっていてはならなかったし，[14] 大衆の文化水準をいっきょに飛び越えた文化・芸術理論はいかにテーゼとして正しく格調高くても，運動の成功を約束するものとはならないからである。

当時のサークル運動の位置をみると，プロレタリア芸術運動のナップやコップを中心とした組織の中で，コップは職場内サークルを中核としており，その主要な役割を「反動文化（国家企業家の教化制度による）との闘争，労働者の政治的経済的啓蒙，労働者の日常の文化的要求の充足等を全体的に統一し，指導してその活動を左翼労働組合の活動と結びつける」[15] ことにおいていた。第1図はコップのサークルの位置を図式風に示しているが，それは，のちによくいわれるように「単なる小集団ではなく，一つの運動の末端として，基礎として，組織的に位置づけられた大衆的なもの」[16] であった。それゆえ初期のサークル運動には明確な目的があり，集団の組織もある程度しっかりしていたということがいわれる。

戦前におけるこうしたサークル運動は，しかしながら蔵原が同時に指摘せざるをえなかったように，大衆の側による自発的なサークルづくりがナップやコップの組織を離れたところで広汎に進行していた。「その（＝サークル）多くは芸術団体の側からの特別な組織的働きかけなしに，自然成長的に組織されつつあるという事実である。むしろ各同盟は，この下からの大衆的なサークル運動に対して，組織的には完全な受け身の立場にあると言わなければならぬ」[17]（傍点長浜）

いわば理論的にサークルを高い次元でとらえながら，運動や実践の水準では立ち遅れが目立った。大衆による自発的なサークルづくりの気運をあたかも，前衛政党とその指導下にある芸術組織の指導転換が，「広汎な大衆の完全な支持」をうけて進行しているとしながらも「完全な受け身の立場」に立たざるを得なかった弱点の克服は，サークルが，公然と政治的方向を示し，それ自身の最小限綱領を掲げなければならないということをくり返し強調するだけで，いっこうになされなかったといってよい。蔵原のサークル理論には，既成組織としての政党や支部，組合の文化部，青年婦人部あるいはまた各芸術組織と，サークルとはどうちがうか，という点が明確でなかった。したがって蔵原の提唱したサークル理論は，大衆の側からわき起っていたサークルの実態から，既に遊離していく

第1図　コップのサークル組織論



（竹内真一「職場のサークル活動」『青年の学習』国土社　1960　216ページ）

状況を生んでいたといえるであろう。

たとえば戦前にサークル運動をやっていた教員鈴木正之は，当時のサークルについて次のように述べている。「別に集団の必要感，目的感を意識的に持っているわけでもなかった」が「素朴きわまる集団本能が，何か共通のエネルギーの発散方向を求めて，肌を寄せあっていた」こうしてつくられたサークルは規約や綱領といった固苦しいものを一切もたなかった。「誰かの下宿にゴロゴロして，夜を徹して語り合うのは，学校では法度の社会事象，身に迫る徴兵制，軍隊，天皇制……。イデオロギーとして固まらなくとも，矛盾を矛盾として見過ごせぬ一徹さが爆発していた。公然と大人の前では語られぬ，また日本臣民として口にすべからざる話題であった。あんな時代にして，原初的な若い熱情集団，自然発生的なサークル活動がありえたということ，いやあんな時代であったればこそ，十代の若僧が，あんな形で時代を受けとめ，あんなエネルギーを発動しあった」[18] こうしたサークル体験は政治・芸術・文化といったレベルではなく日常生活と深く関わるものであった。大衆を組織していく方向と，大衆が組織化を望む方向と結びあう接点は，何よりも日常体験のレベルにまでおりてこなければならない。

もっともサークルを作るという蔵原の提言に対して，それは「文化的セクト主義」「敵のためにお膳立てするもの」であるとしてサークルは直接，前衛政党の指導下におくべきだという強硬派もいたくらいであるから，[19] 当時のサークル理論がこうした形で大衆の手による自由な組織化として提案されただけでも画期的なことであったといわなければならない。かくして戦前におけるサークル理論の果した役割は，一面で大衆のそれと乖離しながらも，サークル運動を明確に方向づけ，確固とした性格を規定したことであった。とりわけ芸術的組織づくりを軸として，これを政治的文脈の中に位置づけたことが，この期のサークル理論のもっとも大きな特徴であった。

第3節　戦後のサークル理論

サークル理論に限ってみても，敗戦という一つの屈曲はやはり大きな影響を与えずにはいられなかった。戦争は日本の大衆の物質的，経済的生活基盤を支配階級に委ねさせただけではなく，大衆の心の中をも支配しようとした。そのような社会状況の中で，なおサークルはひっそりと息づき根づいていたが，それはしかし極めて例外的であった。軍国支配者によって大衆の心は支配者の掌中になすすべもなく握られていた。サークルが新しく息を吹き返すのは，そのような状況の中では全く望み得ず，敗戦を待つほかなかった。

それまで日本の大衆のおかれていた臣民的立場，それは無権利，盲目的服従，基本的人権すら認められないという苛酷なものであっただけに，敗戦によるこれらの桎梏からの解放は，大衆の生活の展望に明るい局面を浮かびあがらせたのであった。しかし，解放のエネルギーが結集されるためには，戦争はあまりにも多くの犠牲を大衆に支払わせていた。そのために解放を目指して立ちあがる大衆の力は充分ではなく，いきおいそれらのエネルギーは日本の津々浦々に至る網の目の中で同志，同好の小さな集団によって灯をともされることになった。そうしてそれらのサークルの中心になったのは青年たちであった。「戦後の若い世代は，正直のところ他から（それがどんな権威であるにせよ）教えられることに飽いているのだ。また，だまされたくはないぞ，という心理なのだ。8・15の向う側では真理であったものが，こちら側では虚偽に変るといった転換のなかに自分を発見した青年たちが，なによりも自分のちからで，と決意するのは自然な心理だ」[20] という言葉に示されるように，青年を中心とする日本の大衆は，再びだまされてはならない，再び同じ道を歩んではならないと心に誓いながら，自からの道を自からの手で拓き始めるのである。その力は戦前における一部の文化人・知識人・政党人およびそのシンパだけとはちがって，日本国民すべてをくぐり抜けさせた戦争という巨大な歴史体験をへた，すべての日本の大衆であった。[21] 戦後のサークル運動とその理論はこうした背景を無視しては語りえない。

そうした視点に立って戦後のサークル理論をみていくと，三つの方向があったということができる。

(1) ファシズム思想・体制への抵抗として（日高六郎「ファシズムの社会心理」を中心とした論文）

(2) 天皇制国家による人間支配の打破と新しい人間の結びつきとして（鶴見俊輔「戦後日本の思想状況」を中心とした学派）

(3) 大衆社会における人間疎外の状況との関連において（高橋徹・城戸浩太郎・綿貫譲治「集団と組織の機械化」を中心とする社会学における集団論グループ）

これら三つの理論動向に共通するのは，いずれもが，戦後日本の歴史的，社会的風土に重点を置いているということである。そしてそれぞれ固有の学風でサークルを追求していった。これら三つのサークル理論をどう見るかということは，今日のサークル運動にかなり決定的役割を果たすことになる。以下，それぞれの方向についての検討を試みたい。

1. 対ファシズムとしての思想

わが国における大正中期から敗戦に至るまでのファシズム運動が，たんに個人主義的自由主義的世界観の排除，議会政治の軽視，対外膨張，軍備拡充や戦争に対する讃美，民族的神話，国粋主義などといった傾向をもつだけでなく，いわゆる日本的ファシズム・イデオロギーとして「家族主義的傾向」「農本主義的傾向」および「大亜細亜主義的傾向」[22]にみられる鋭い分析を加えた丸山真男はつぎのように氏独特の視点を据え，こう述べている。

「たしかに日本軍国主義の辿った結末は巨視的には一貫した歴史的必然性があった。しかし微視的な観察を下せば下すほど，それは非合理的決断の尨大な堆積として現われてくる。問題はこうした日本政治の非合理性や盲目性を軽視したり抹殺したりすることではなくして，それをどこまでも生かしつつ，いかにして巨視的な，いわば歴史的理性のパースペクティヴに結合させるかということでなければならない」[23]（傍点原文）

8・15という一つの転機はその意味で政治における「非合理性」と「盲目性」の克服をファシズム体制下に抑圧，屈服を強いられた日本の大衆に求めたのであった。いいかえるならば，大衆における「非合理性」と「盲目性」への反旗こそが彼らの頭上高く掲げられなければならなかった。なぜなら日本的ファシズム・イデオロギーに大衆がのめりこむような脆さが，まんまと権力者に吸収，利用されたといってもよいからである。それは何も日本的であることにこだわるものではない。大衆という存在に対するファシストたちのものの考え方に，それは一貫して流れている。ヒトラーは「群をなしておれば，人間というものは，実際にこれに反する千の理由があろうとも，つねに何か安心感をもつものだ」と言って，大衆集会を積極的に活用した。それは大衆が「外交官から成り立っているのではなく，また国法学者のみから成り立っているのでもなく，まったく純粋に理性的判断からでもなく，疑惑や不安に動揺して傾きがちな人類のこどもから成り立っている」からなのであった。かくして，ファシストの大衆観を，さらにヒトラーに語らせるとつぎのようになる。

「大衆の心理は，すべて中途半端な軟弱なものに対しては，感受性がにぶいのだ。女性のようなものだ。彼女らの精神的感覚は，抽象的な理性の根拠などによって定められるよりも，むしろ足らざるを補ってくれる力に対する定義しがたい，感情的なあこがれによって決せられる。それゆえ，弱いものを支配するよりは，強いものに身をかがめることを，いっそう好むものである。大衆もまた哀願するものよりも支配するものをいっそう好み，そして自由主義的な自由を是認するよりも他の教説の並存を許容しない教説によって内心満足を感ずるものである。（中略）かれらは全教説のうちにひそむ狂気に決して気づかないからである」[24]（傍点長浜）

大衆に対する徹底した「非合理性」と「情緒的感覚」の利用が，ナチズムとはまた別の次元で一人一人の日本の大衆に浸透していく過程は，軍国的支配者におけるそれと，日本の大衆との奇妙な和合の形態をとって進められた。そこに日本特有の構造がある。丸山真男がその構造を軍国支配者に視座を設けて解明したとすれば，大衆の側に照準を合わせて追求していったのは日高六郎であった。氏はファシズムが真に恐ろしいのは，大衆の意志と希望に反して行動するのではなく，ある程度大衆の自発的な支持を獲得するという点にあるといい，そのために大衆は受動的，被操作的存在から脱皮した「主体的」「能動的」民衆に移行する道を考えなければならないとしたのであった。実際のところ，ファシズムが大衆を襲うのは，一つの波が岸をたたくような形ではなく，心理的浸化作用としてである。気がついてみると社会の状態が一度に灰色に曇っているのであった。ドイツの言語学者メイヤーはそういう推移を率直にこういい表わしている。

「気がついてみると，自分の住んでいる世界は――自分の国と自分の国民は――かって自分が生れた世界とは似ても似つかぬものになっている。いろいろ形はそっくりそのままあるんです。家々も，店も，仕事も，食事の時間も，訪問客も，音楽会も，映画も，休日も……，けれども精神はすっかり変っている。にもかかわらず精神をかたちと同視する誤りを生涯ずっと続けてきているからそれは気付かない。いまや自分の住んでいるのは憎悪と恐怖の世界だ。しかも憎悪し恐怖する国民は，自分では憎悪し恐怖していることさえ知らないのです。誰も彼もが変ってゆく場合には誰も変っていないのです」[25]（傍点丸山）

抵抗しようにも抵抗すべき拠点を失った大衆はただその流れに身をゆだねるより他になすすべがない。一人一人の人間が孤立化とマス化の中にたくみに投げこまれ，巨大な社会的圧力に直面すれば，かれは理性を失ないやがて感情に屈服をよぎなくされる。そのために，「主体的・能動的民衆」[26]への確立を目指すことが，戦後の社会的，大衆的課題であった。日高六郎はその足がかりをサークルに求め，「各人が最後まで友人的，同志的な結合をたち切られないような，小さなグループと結びつくこと」が必要であると主張した。それは「ファシズムに抵抗する方法であるばかりか将来の『巨大な』社会主義

社会における『社会対個人』の関係を調整する一つの方法」でもあると述べて対ファシズムの思想から将来の社会主義社会に至る大衆のありかたの構図を描いたのであった。「いわゆる『大きな社会のなかで，小さな人間のために民主主義的な生き方を発見する』ためには，小さな人間の自発性と創造性とが発揮できるための，小集団が作られなければならない」[27]（傍点長浜）日高がこうしたサークル理論を生みだしたのは，明らかに戦争体験と，戦後日本の革命運動としての大衆運動のもりあがりに裏づけられていたからであった。それゆえ戦前におけるサークル理論とは異なった次元で提起され，サークル運動に一定の影響を与えることになった。極めて短かい論文ながら，その投じた一石はゆるやかな波紋を日本のサークル運動に広げていくようになる。

2. 新しい人間の結びつきとしての思想

日高が大衆の抵抗の最後の拠点として，「小集団」つまりサークルの重要性を説いたのに対し，いま一つのサークル理論は，敗戦まで日本がもっていた大衆のタテ（天皇—臣民，国家—家，ムラ）のつながりの論理を否定し，新しいヨコ（人間—人間）のつながりの論理を求めようという方向から現われた。

それは鶴見俊輔が提起したもので，8・15まで日本がもっていた大衆の集団の形は「家」あるいは「国家」であり，せいぜいその中間として「翼賛運動」があるのみであった。こうした体系は大衆を支配と服従という権力における両極をもっともすっぽり，しかも合理的につつみこむ，極めて都合のよい組織であった。いいかえればタテの人間関係を通して国家権力が支配力を強める機能を最大限に発揮しうる組織であった。敗戦によって日本の大衆はようやく「家」や「国家」から離れた，親密で，平等で，気軽に人と人とを結びあえる新しい人間関係をつくれるようになった。そこに鶴見はサークルの存在の意味を見つけだした。

「つまり国家が各個人にしいている支配服従のたての人間関係倫理にたいして，家はすくなくとも国家よりは各個人の人間性を大切にするという意味でよこの人間関係の倫理の芽ばえをもっていたわけだが，これは普遍的な倫理の形にまで一般化されることがなかった。サークルは，家の中でなりたっている相互扶助をひろげて行く過程で，よこの倫理を自覚的につかむことができるようにする。徴兵制度とか，戦時公債のわりあてとか，官僚主義的な経済統制，言論の弾圧など，ファシズムが成立する場合に政府のうってくる諸種の政策にたいして，もっともしなやかな仕方で，長期にわたってたたかいうる条件をサークル方式の普及は用意する」[28]（傍点長浜）

鶴見のサークル理論の発想が，「戦後日本」という特殊状況から出ていることは，さきにみてきた日高六郎と変らない。しかし日高が提起したサークルは政治的文脈の中に位置づけられ，ある意味ではかなり大衆の戦略的抵抗権を含みながら描かれていたといってよい。いっぽう鶴見の場合には，サークルをいったん政治的文脈から切り離し，[29] もっと広い対象を含ませる形として，ヨコの人間関係を軸とした文化的・日常的次元の問題としてとらえている所に両者のちがいがあった。鶴見における文化的・日常的次元はしかしながら大田堯における「たまり場」的なものとも違っているようである。それはたとえば「出発点ではつきあいサークルでいいのだと思う。あいつは好きだとか，きらいだとか，という感情は未来の思想をふくんでいる。……サークルは自然発生的なつきあいから始まる。方向はつきあいの中から出てくる。われわれが誰とつきあい，どんなつきあいかたをするのかの中に含まれているような仕方で，出発点で，サークルと思想とはかかわっている」[30]（傍点長浜）という表現に端的に示されている。大田堯が村のたまり場の歴史性と重要性を説いたのは，いうまでもなく文化的・日常的文脈の中ではあったが，それは結局「行きどまりの逃避の場」[31]にしかならないということを見抜いての事であった。その意味で鶴見が，サークルの発展とその方向をつきあいの仕方に求めていったということは率直にいってかなり前近代的感覚を匂わせているように思うが，意外に鶴見のこうしたサークル理論が戦後のサークル運動の現場に，まったく看過できない大きな役割を来たすことになった。これについては別に項をあらためて述べなければならない。（第3章参照）

3. 大衆社会における小集団論

これまでみてきたサークル理論の二つの方向はいずれもが，敗戦による価値の転換と新しいそれへの選択を直接，間接のきっかけとしたのに対して，いま一つのサークル理論は「現代社会」という軸を中心としたなかで展開されることになった。それは一般的には小集団理論というかたちで現われ，サークル理論を包みこむ中で，サークルに対する新たな意味づけを行なおうとしたといえる。もっとも小集団理論といっても二つの流れがあり，いわゆる社会学的なそれと心理学的なそれであるが，[32] サークル理論に関する限りでは前者が中心となっている。

彼ら小集団研究グループは，まず小集団が問題化したのは「現代社会の官僚化という文脈」においてであるとし，二つの対比としてその構造をとらえた。第一には

「現代社会の大規模組織ならびに社会機構全体の非人格性」であり，第二には「現代社会における大規模組織ならびに社会構造が個人に課する部分性，他律性」である。そういう現代社会の「非人格的な機構のなかで原子化され疎外された個人の情緒的不安——いわゆる『情緒的飢餓』——を回復し，個人の感覚的平衡を保つ機能」として，サークルが位置づけられるとしたのであった。(33) これによってわかるように小集団理論におけるサークル理論は「現代社会」の構造の中に置かれている。このことは日高や鶴見が，サークルそのものに焦点をあてていったのに対し，小集団研究学派グループはサークルの一定の運動なり理論を現代社会の外枠から再点検し，解釈し直したものといってよい。したがって，サークル理論を吟味し，新しい展望を切り開くという意味での期待は大きかった。

小集団の意義の重要性はナチズムを身をもって体験したK．マンハイムがつとにくり返し強調していたことであった。(34) それゆえ小集団理論に期待されたのは，変革と危機の思想に対決するための理論であったはずである。「現代社会」という文脈のなかで小集団理論が果たすべき本質的な課題はそこにあったといわなければならない。それに対する答えはどうであったか。それはつぎの言葉に端的に表現されている。

「このような小集団は，それが自然発生的であり，自発的であるだけに，不定形であり，そこから独自の方向感覚に導かれていろいろの方向をとりうると同時に，また外部の状況に応じてたやすく消滅したり，あるいは状況のなかに併呑されるという性格をもっている。巨大組織が聳立し，それがあらゆる生活領域を支配している現代社会では，無定形な小集団は社会的影響力を行使しうる単位としてあまりにも無力な存在である。小集団の活動への主体的参加によって培養された主体的意識や全体的思考も，巨大な社会的圧力をまえにした小集団の無力さに直面すると，問題解決の困難さからくる焦慮感に導かれて，たやすく小集団そのものに対する失望感に退歩してしまう」(35)（傍点長浜）

大規模社会の中におしこめられ，原子化（アトマイズ）され疎外される大衆が，依拠すべき価値集団としてのサークルを小集団研究学派グループは「無力」であるとする。サークル運動における日本の大衆の自発的，主体的参加という事実が否定されることによって，こういう小集団理論が大衆の側から見離されたのは当然としても，サークル運動の現状を考えるときに全く無視できない面も持っているのは事実である。しかし，それを大組織—小集団—個人という「空間軸」に置いて，サークルは無力であるから，小集団＝サークルとせずに，小集団＝組合の下部組織，政党における青年組織としてとらえようとする一部の意見(36)は，あまりにもきれいごとすぎるという感じをすて切れない。サークルが無力だからだめ，という発想は小集団理論における解釈主義の欠陥を正したうえでないと承服しがたい。

第4節　サークル理論の連続と断絶

戦前と戦後におけるサークル理論にみられる共通因数と異質因数はなにか。両者から引継ぐ遺産をわれわれは共有しうるか。これまでみた限りでは，サークル理論における原点を構築する作業はほとんど困難なことがわかった。しかし困難であるにも関わらず，その作業を続けることが，サークル理論の不在ないしは混乱から脱けだす道につながっているとすれば，われわれはその作業を途中で打切るわけにはゆかない。

戦前と戦後におけるサークル理論に，ある種の断絶を置いてみることが，今日では一般化している。さきに紹介した鶴見の表現ばかりではなく，戦後になってサークル理論を説きはじめた人々の口調は一様にそのことを強く訴えていた。「それは特定の政治的党派の指導によって掘りおこされた運動ではなく，民衆のあいだから自然と湧出し，底層から社会政治的文脈のなかへ滲潤していく草の根たちの自己表現のいとなみであった」(37)（傍点長浜）私にはなぜかくも戦前と戦後のサークル理論にこうした断層をつくろうとするのか極めて理解しがたい。つまるところ，サークル理論における継承すべきポイントはこの辺にあると思う。なぜなら，両者の間に存在するであろう問題の中にこそ，今日におけるサークル理論の本質が集約化しているに違いないと考えるからである。そこでこの問題を三つの局面に限定して検討していくことにしたい。

第一はサークルのもつ原初的な機能としての問題である。大田堯はこれを「たまり場」と表現した。鶴見，日高はこれを大衆の解放という次元でとらえた。この間にはとりたてていうべき彼我の差異はない。つまり「たまり場」におけるメンバーのホンネは，最小の意味における解放であり，そこで語られる思想は土着の生きたものであり，またそこにおける「つきあい」もまたサークルの原型をもつものであった。土着の思想が未体系の思想であるがゆえにこれを解放の思想たらしめることが三氏に共通した見解である。サークルは土着性→日常性→解放の統合体として提起される。ここには何の異議をさしはさむ余地はない。蔵原理論はいってみれば，統合体を構想するところにすっぽり収まっている。もしそこに難

点を求めようとすれば蔵原理論は解放→日常性→土着性とヴェクトルの向きが逆転していたという点であろう。この差異は根本的理解の対立というように大げさに騒ぎたてるほどのものだとは思われない。それは方法論における相違と正しくはいうべきである。戦後のサークル論者はこの逆転のヴェクトルをいかにも鬼の首でも取ったかのようにとらえているのであるが，それはそうとらえているほうの主観的曲解といわねばならない。

第二に政治的文脈と文化的文脈の差異といった問題をとりあげなければならぬであろう。戦前戦後のサークル理論における相違を端的にかつ率直に表現するとすれば政治的性格と文化的性格の濃淡のちがいである，というほかない。戦前に提唱されたサークル理論は大衆の文化的組織を広汎につくりあげていくという意味では文化的性格をもってはいたものの比重は前衛政党の勢力拡大[38]という政治的性格のほうに置かれていた。いっぽう戦後サークル理論の旗頭をつとめた日高，鶴見らは，国家権力の抑圧，弾圧，自由と基本的権利の浸害に対する最小のトリデという意味ではまさしく政治的文脈の上にサークルを乗っけていたけれども，実質的には大衆の日常性の中にその拠点を置いていたわけで，蔵原の政治的文脈と両氏の文化的文脈の間にはやはり相当の開きがあったとみるべきであろう。問題はこうした落差よりも，後者が意図的に政治的文脈からの切り離しを意図した，ということである。後で扱う問題であるが，こうした意識的なひきはなしが，サークル運動の現場，実践者たちに与えた影響はただちに停滞，混迷という形となってあらわれたのであった。

第三にサークルの「運動」と「理論」という局面である。サークルが大衆の中に密着し，浸透していればいるだけ，その運動と理論もまた両者のへだたりを最小限のものとしていなければならない。ところがサークルはその発祥から現在に至るまで最大限のへだたりをもってきたといわなければならない。蔵原がサークル理論を提唱したのは 1931 年であるが，運動はそれより以前に始まっており，しかも蔵原も，大衆の自発的サークルが，ナップやコップの働きかけなしにどしどし生まれ，いまやわれわれは「完全に受け身の立場」[39]にあると嘆息したものであった。恐らくこうした運動と理論の乖離は，サークルの本質と深く結びあうものであろう。戦時中の極限状況下での一時的な中断はあったにしても，サークルが文化的文脈の中で，連綿と続いてきた事実は何を物語っているのであろうか。それを単に政治的暗黒の中に投げいれて理解してしまうことはあまりにも易いことである。政治的文脈の上で消滅しながら，文化的文脈の上で戦時中のサークルが生きのびたということは，確かに今日のサークルの運動的指標を示している。しかし，それが短絡的に戦前におけるサークル理論の否定と結びつけられる戦後論壇の狭量さもさることながら，サークルの「運動」と「理論」とのへだたりをうめようとはせず，かえってその間に断絶を置くことで新しいサークルの出発を求めたところに本質的な欠落があったといわなければならない。

最後に，こうした三つの局面に，小集団理論はどう関わっているのかということにふれておかねばならない。結論的にいいきってしまえば，小集団理論は大衆の日常性における未体系としての思想の把握につまずいたばかりではなく，サークル理論の否定という大きな誤まりをもおかした，といえるであろう。彼らは分析のフレームを大衆社会だとか，現代社会とかいうレベルに固着するのあまり，大衆の底力を無視ないしは軽視してしまった。したがってサークル理論を提出してはみたものの，原理的表面的解釈しか結果的にはなしえなかった。しかし，小集団理論が大衆の土着性と日常性に分析の視座を据えるならば，サークル理論に対する新たな視野を構築することができるであろう。[40]

〈註〉

（1） この説については土井大助がぬやまひろしの見解として引用して，非歴史的・観念論的把握にすぎないと批判している。（「文化サークルについて」『文化評論』1968年9月号）

（2） 奈良本辰也「日本のサークル運動」『文学サークル』理論社。氏がこの著書のなかで「戦前のサークル活動は……労働運動や左翼政党の補助的な役割をつとめるものとみなされていた。だから，それらのグループ，すなわちサークルができ上がると，それはただちに政治的なまた実践的な行動を要求されたのである」と述べている点は，戦後のサークル運動に対しても他の理論家たちの口からくり返し強調されることになった。この点についての批判は後述。

（3） ただし，小集団運営という意味における小集団論はサークル理論にとってかなり示唆する点が多いと思われる。しかしそれは集団論であってサークル論ではない。

（4） 宮城音弥編『心理学』岩波小辞典 1956年 79ページ。この他に例えばレヴインは「集団をひとつの力学的全体として考えることは，その成員（または更によいいい方をすれば，その集団の下位部分）の相互依存にもとづくような集団の定義を包含しているべきである」とあっていよいよ心もとない。（Kurt Lewin "Field Theory in Social Science" 1951 邦訳『社会科学における場の理論』猪股佐登留訳 誠信書房 146ページ）

（5） T. M. Newcomb "Social Psychology" 1950 邦訳『社会心理学』森東吾・万成博訳 培風館 495ページ

（6） M. S. Olnsted "The Small Group" 邦訳『小集団の社会学』馬場明男・早川浩一・鷹取昭訳 誠信書房 1963年 13ページ

（7） 大田堯『農村のサークル活動』農山漁村文化協会 1956年 228ページ，231ページ

（8） 大田は〝サークルのめざすもの〟として

1. 義理としきたりの支配する社会に自由をとり戻すこと
2. 劣等感を克服して〝もちまえ〟の力を自覚し，とりもどすこと
3. ほんとうのこと――真実をとりもどすこと
4. 愛情をとりもどすこと

の4つをあげている。「たまり場」から出発するサークルがこのように啓蒙的・教養主義的に把えられるところに致命傷がやどっていた。「サークルはつぶれる自由ももっているのです」「サークルをあ

まりに計画的，固定的に考えないでよいと思います」「毎日をすこしでも豊かにすればよいのです。」（同書 250—251 ページ）

（9） 柳田国男「農村雑話」（大正 15 年）『定本　柳田国男集』第 16 巻，1970 年　筑摩書房　434—436 ページ

（10） 「工場内の労働者大衆をよりよく結成するために，非合法的組合は種々の合法的，半合法的そしてまた公然と存在する補助組織，例へば国際赤色救援会グループ，スポーツ団，相互扶助組織，文化サークル，労働組合文書の配付グループ，一般教育のためのクラブの如きに頼らねばならぬ」（「革命的労働組合運動の組織問題」『インタナショナル』1940 年 12 月号

（11） 「文化・教育活動のためのプロレタリア大衆組織は…工場がその活動のための主たる基礎であらねばならぬ。それ故にプロレタリア文化・教育組織にとっては，すべての工場内に自己のグループ，活動団および特別の世話役団を，その援助によって活動するために創設することが極めて重要である。全文化活動は工場内で革命的赤色工場委員会の活動と結合し，出来るだけ多くの労働者をその中に引き入れるべきである」『プロレタリア文化・教育組織の役割と任務』（この部分は蔵原惟人の「プロレタリア芸術運動の組織問題」より重引した）

（12） 古川荘一郎「プロレタリア芸術運動の組織問題」『蔵原惟人評論集』109—110 ページ

（13） サークルという呼称についていえば「プロレタリア芸術運動の組織問題」というこの論文ではグループという用語しか使っていない。サークルという言葉を使うようになったのは 2 ケ月後に書いた論文の中である。「サークルの名称は何もサークルとかグループとかいった言葉に拘泥する必要はない。それぞれの必要に応じて何々工場文芸座談会，演劇愛好者の会，文学茶話会，美術研究会等々というふうに，なるべく自由な近づきやすい名称にすべきである」（「芸術運動の組織問題再論」『ナップ』1931 年 8 月号『蔵原惟人評論集』178—179 ページ）これ以後サークルという言葉がグループよりも多く使われるようになったことは事実の示すとおりである。

（14） しかもこの当時において「わが国には 500 万の工業プロレタリアートを有しながら，その中のわずか 35 万が組織されているに過ぎ」（蔵原　同書 125 ページ）ないことが報告されているのである。

（15） 蔵原　前掲　129 ページ

（16） 三浦つとむ「サークル」『大衆組織の理論』勁草書房 1959 年 95 ページ

（17） 川口浩一（蔵原惟人）「芸術運動における組織問題のより高い発展のために」『プロレタリア文化』1932 年（のち「蔵原惟人評論集」第 II 巻　290—291 ページ

（18） 鈴木正之「戦前・戦後の体験から」『教育』1968 年 11 月号 75 ページ

（19） その論争は川口浩一「芸術運動における組織問題のより高い発展のために」（前掲）に詳しい。ここで反論を唱えたのは勝本清一郎（「ナップ」1931 年誌上）であった。これに応えて蔵原は重ねてサークルの位置づけを「(1) 同志勝本の考えているよりもはるかに広範なものであって，あらゆる工場，農村，会社，学校等々に作られ，およそ芸術に何等かの興味を有する幾万・幾十万の労働者，農民およびその他の勤労者を結びつけるものであり (2) それは同時に芸術団体ばかりではなく，あらゆる我々の組織のための貯水池ともなり，また伝導体ともなるべきものである」（284 ページ，傍点長浜）と述べ政党の下部機関化・補助組織化としてのサークルに対する見解を打ち出している。

（20） 荒正人「20 代の不信」『中央公論』1947 年 12 月号　43 ページ

（21） 戦争体験による世代の問題と戦争責任の問題については拙稿（「わが国における戦後世代論の展開と課題」『北大教育学部紀要』第 17 号 1670 年）で若干ふれた。ここでは一人の大衆のナマの声を伝えるにとどめたい。

「…春秋 2 回の靖国神社のお祭に出かけるのをせめてもの慰めとしている。社殿に額ずいて，亡き息子と語るひとときは心が落着く。然し思いはそれからそれへととめどもなく千々に乱れながら，70 年の生涯における出来ごとを走馬灯のように去来させる。生れて幾年も経たぬうちに遺児にされてしまった私。明治維新で秩禄を失い，生活の糧を求めて北海道へ羅卒を志願し，治安の闘いで傷死した父。物心ついた頃は日清戦争があり，日露戦争には駆り出されて凱旋はしたが生業の上に痛手を蒙り，第一次世界大戦では成金風情のために苦しめられ，太平洋戦争ではかけがえのない息子を失うという悲運に見舞われた。まことに戦争から戦争への連続であり，その谷間に伸吟していたのが私の生涯であった。」（太田磐造「空々漠々たる人生」『世界』昭和 32 年 8 月号）

当時 72 歳のこの老人の人生の軌跡は，いいかえれば日本の大衆がたどってきたそれと同じものであったといえるのではあるまいか。

（22） 丸山真男「日本フアシズムの思想と運動」（1947 年）増補版『現代日本の思想と行動』未来社 1964 年 42—57 ページ

（23） 丸山真男「軍国支配者の精神形態」（1949 年）前掲 91 ページ たとえば第二次大戦は「世界情勢と生産力其他の国内的条件の緻密な分析と考慮から生まれた結論ではなく，むしろ逆にミュンヘン協定のことも強制収容所のことも知らないという驚くべく国際知識に欠けた権力者らによって『人間たまに清水の舞台から眼をつぶって飛び下りる事も必要だ』という東条の言葉」（89 ページ）によって始まったものだった。まことに驚くべきことだが，何の見通しも計画も持たずに「必勝に対する盲信」と「ソ連邦の崩壊をあて」（極東裁判におけるゴルンスキー検察官の言葉）にした滅茶苦茶な戦争であった。キーナン検事が「この共同謀議の分析に関する困難の一つは，それが非常に広汎な範囲のものとなるため，これが一群の人間により企図されたものとは考え難い」と呆れとも嘆きともつかぬ言葉を吐いたのは，けだし当然であった。

（24） Adolph Hitler "Mein Kampf" 1924　邦訳　平野一郎・高柳茂訳『わが闘争』第 1 巻　黎明書房 1961 年 54 ページ

（25） Milton Mayer "Theory thought they were free" 1955 丸山真男「現代における人間と政治」の邦訳より重引『現代政治の思想と行動』471 ページ　さらに付け加えるならば，氏が紹介している教会の牧師のつぎの告白もまたフアシズムの民衆浸透を語る好例である。

「ナチが共産主義者を襲ったとき，自分はやや不安になった。しかれども結局自分は共産主義者でなかったので何もしなかった。それからナチは社会主義者を攻撃した。自分の不安はやや増大した。けれど依然として自分は社会主義者ではなかった。そこでやはり何もしなかった。それから学校が，新聞が，ユダヤ人が，というふうに次々と攻撃の手が加わり，そのたびに自分の不安は増したが，なおも何事も行わなかった。さてそれからナチは教会を攻撃した。そうして自分はまさに教会の人間であったそこで自分は何事かをした。しかしそのときにはすでに手遅れであった。」（丸山前掲 475—476 ページより重引）

結局，教会牧師であるこのニーメラーも強制収容所へ送られる。

（26） 日高六郎「現代の民衆」岩波講座『現代』第 11 巻 1964 年 3 ページ

（27） 日高六郎「フアシズムの社会心理」『思想』1952 年 11 月号（のち「現代イデオロギー」勁草書房 1960 年所収 34 ページ）

（28） 鶴見俊輔「戦後日本の思想状況」岩波『現代思想』第 11 巻 1957 年 70 ページ

（29） この件に関して鶴見は，はっきり次のように言い切っている。「明確な政治的プログラムの中にくみいれられたものとしてのサークルは，1933 年以後は消滅し，20 年をへてこの言葉が復活したときには，このような政治的文脈から意識的に離脱するための旗印として同じ言葉が使われたのである」（前掲 65 ページ）ここで氏は 2 つの誤りをおかしている。(1) 1933 年以後，政治的プログラムをもったサークルが消滅したとされる根拠はどこにもない。筆者の調べた限りではそのことを証明するに足る資料はない。(2) 政治的文脈から意識的に離脱するためにサークルという用語が使われたという表現は明白な誤認である。戦後の青年の学習サークルは，むしろ意識的に政治的文脈に接近している。

（30） 鶴見俊輔「思想の発酵母胎」『思想の科学』1959 年 7 月号 38 ページ「だからサークルにとっては，つきあいが第一のものであり，仕事は第二のものである」（同）

（31） 大田堯　前掲 236 ページ

（32） small group theory とサークル理論とが統合される可能性は現在のところ人間関係的管理技術の局面で結実しているが，これはいうまでもなく企業内における生産性向上の術技として使われており，QC サークル，ZD グループに運用されている。これらの理論的背景にはたとえばホーソン工場の実験で知られている F. J. Roethlisberger and William Dickson "Management and the Worker" 1934 や Homans, George "The Human Group" 1950 がある。しかし Cartwright and Zander "Group Dynamics" 1953 や Hare, Borgatta and Bales "Small Groups" 1955 を中心とする小集団理論とサークル理論との生産的な理論的結合は労働者ないしは大衆的視点から悪請される課題である。

(33) 高橋徹・城戸浩太郎・綿貫譲治「集団と組織の機械化」岩波『現代思想』第8巻 1957年 150—151ページ
(34) K. Mannheim "Man and Society in an Age of Reconstruction" 1940 邦訳 福武直訳『変革期における人間と社会』みすず書房 1962年「小集団においては，誰でもみな，自己の行為に依存することが多大であることを感じ，かつ名もなき大衆の中に没入してしまわないで自己自身の責任において行動することを学びとるが故に，個性を殆んど間違いなく発展させるような社会型が成長する。」(319ページ)
(35) 高橋徹・城戸浩太郎・綿貫譲治 前掲 154—155ページ
(36) 綿貫譲治「現代社会における組織と人間」『現代政治と社会変動』東大出版会 1962年 141—142ページ
(37) 佐々木斐夫「新しい文化の創造」講座『社会学』第7巻 東大出版会 1957年 223ページ
(38) 蔵原惟人「芸術運動における組織問題のより高い発展のために」前掲，具体的には同注(19)参照
(39) 蔵原惟人 前掲 291ページ
(40) 大衆社会，大衆文化というまどわしの言葉の中に，大衆のある部分がそのカテゴリーに囲われる事実を私も否定はしない。しかし仮りにそういう状況が進行すればするほど，大衆は人間と人間との結合欲求を高めていく。パーソナルテレビをもち，パーソナル・カルチュアーを楽しむような，いわゆる文化のパーソナル化が進めばそれだけますます大衆は自己主体の確認と解放を求めて，友を，仲間を話し相手を求めてドアの外へ出てくるであろう。

第2章　戦後サークル運動の分析

第1節　サークル運動の概況

わが国の戦後におけるサークル運動をながめてみると，おおよそ5つの時期に区分できるのではないかと思う。戦後あまり長くない時期をあまり細かく切ってしまうことは考えものだが，サークル運動に関する限り，発芽期——成長期——隆盛期——維持期——現在というサイクルを落とすわけにはゆかない。サークル運動の状況を鳥瞰し腑分けする作業が客観的になされれば，それだけ運動は前進の照準を得やすくなる。その意味で運動は法則を生み落としてくれるはずであり，これを単に歴史的に明らかにするだけでなく積極的な価値選択を付加した作業として取りあげなければならない。

第1表　サークル運動の概況

	第Ⅰ期（発芽期）	第Ⅱ期（成長期）	第Ⅲ期（隆盛期）	第Ⅳ期（維持期）	第Ⅴ期（潜在期）
	昭20 ～ 23年	昭24年 ～ 28年	昭29年 ～ 33年	昭34 ～ 38年	昭39年 ～
概況	敗戦による価値転換への大衆の主体的意欲的取組みの準備期。2.1ゼネストへの労働者意識の高揚と農村における反封建の気運の高まり，主として政党・組合によるサークルが中心となる時期。	逆行的な政治動向と新しいファシズムへの危機感から平和運動の動き活発化。人間性の回復と解放が生活実感によって主張される。青年の自主的，主体的学習集団の官制化。農村におけるサークルが中心的に展開される時期。	うたごえ運動の急速な発展と波及。「一人の百歩より，百人の一歩」をスローガンとした国民的サークル運動の推進。平和運動や反動立法斗争を通じての学習サークルの重要性の力説と普及。資本家，支配階級による干歩，弾圧強まる。	大衆運動の広汎な統一戦線によるサークル運動の積極的参加。第Ⅲ期における運動の反省における評価をめぐる矛盾の顕現。サークル理論における対立の激化による停滞と沈黙。サークルの原点が問われる時期。	安保体制下における，たたかうサークルの出現と大衆運動との結合。サークルはしだいに政党・組合の組織論に定着。いっぽう未組織青年労働者による没価値的親交サークルがさかんとなる。サークル再生のための潜在的準備期。
運動	(人生雑誌)—「若い広場」(23)—「葦」(24)—「人生手帖」(27) →				
		(うたごえ運動)(28) →			
		(生活記録運動)(29) →			
			(原水禁運動)(30) →		
			(安保阻止国民運動)(35) →		

〔註〕(1) 矢印は運動の展開時期とその延長を示している。
(2) 数字は昭和をあらわす。この年代は必らずしも運動の発祥を示していない。

そこでまず，サークル運動の一般的な動向の分析から入っていくことにしようと思う。戦後のサークル運動をどこでどう区切っていくかという点では諸説がいり混っている。まさに屋上屋を架すことになるが，敢えて一つの試論を提起すれば第1表のような形になるのではあるまいか。現実科学としての宿命でもあるが，人間科学(仮にこういうとすると)の諸法則は，概ね運動とか実践とかいう具体的営為の検証の結果として確定する。サークル運動もまた同様であって，運動の後にサークル理論ができあがる。決してその逆ではない。それゆえ，サークル理論の構築は，いうまでもないことであるがまず運動そのものの正確な考察から始められなければならない。

1.　第Ⅰ期〔1945～1948〕

第Ⅰ期は敗戦から昭和22年の 2・1 ゼネスト中止を中心とする時期である。この期はいわゆる知識人論争を中心として，大衆と知識人における乖離，断絶が問題となった。それは戦争をくい止めえなかった反省として出され，知識人階級への自己批判，大衆における理論不信の問題等をめぐって論じられたが，(1) 結果としては例によって大衆不在の論争をくり返しただけにとどまった。しかし，当時の知識人論争が両者の相違——知識人の無力感，大衆における不信感——を明確にしたという点で，この期のサークル運動に一つの示唆をあたえることになった。それは一つの具体的実践の中で「理論信仰」と「実践信仰」(丸山真男)を止揚させることであった。サークルはまさしくその点で知識人と大衆とを結びつける媒体になりえた。(2) しかし，現実にはサークルは大衆の側にのみ立たざるをえなかった。したがって「理論信仰」と

「実践信仰」の統合は大衆の手によってなされることになるのである。そこにサークルの長所も短所も一緒に投げこまれ，この伝統はその後ずうっと続くことになる。このようなわけで第Ⅰ期サークル運動は政党，組合において部分的に戦前のサークル理論を引継いで行われるのみで，大衆的基盤の上には立てなかったのである。

農村を中心としたこの期のサークル運動とその担い手たちを分析した木下春雄は，つぎの4つに特徴を見出している。[3] 第一は農民運動その他政治的運動とかかわりをもった社会科学の学習が進められたことである。それには進歩的インテリゲンチャの指導によるものが多く，時として，このような学習サークルから活動の担い手を生んでいる。第二には政治的，経済的運動とは無関係に読書意欲，知識欲の充足を求めて読書会や，少数ではあるが演劇サークルがつくられたということであり，第三に戦中から戦後への断層，学力喪失の実感から，より自然発生的に学校時代の教科学習の補充，学力回復という補習教育的な学習会が組織された。第四に村内支配層が戦後の動揺から旧秩序を維持するため「文化国家建設」等のスローガンをかかげて「文化会」「読書会」を組織し，イデオロギー的次元で旧秩序の再編を目論んだということである。

ここでわかるように第Ⅰ期は疎開文化人の指導による進歩的サークルづくりと旧支配秩序の維持と建直しをはかろうとする体制サークルとが拮抗しあっていたことである。しかし，疎開文化人にはサークルの性格についての認識が未だ充分ではなかったために，彼らは大衆の真の指導者とはなりえなかった。いっぽう昭和23年以降，アメリカの占領政策は日本の青年団体に直接的な指導を加え，オリエンテーションに始まってエヴァリエーションに終るグループワーク理論を導入し，いわゆる〝ションション青年団〟の組織化を意図し，骨ぬきの団体に編成しなおそうとした。しかし他方では2・1ゼネストは占領軍指令によって中止されはしたものの，この闘争をつつみこんだ労働者大衆に広汎な政治的自覚をあたえ，都市労働者のみならず農村労働者にも影響を及ぼし反封建，反動への強力な闘争基盤を生みだしていったのであった。

2. 第II期〔1949～1953〕

第Ⅱ期はアメリカの対日政策の転換が日本国民の誰の目にも明らかとなる時点に始まる。占領軍指令官マッカーサーは「日本は共産主義進出阻止の防壁」(昭和24年7月4日)であると演説した。ドッジ・ラインの施行による貸幣の下落，中小企業の倒産，失業者の増大など社会不安がつのっていった。こうした一連の情勢はアメリカ経済の日本経済従属化から発しており，それは労働運動，大衆運動への規制，弾圧体制の強化を招くものであった。団体等規正令(24年4月)，労働組合法および労働関係調整法の改悪(5月)その他言論，集会，結社の自由を侵害する弾圧体制をひいて官公庁労働者26万人，民間労働者30万人の強行首切りを強行した。下山(7月5日)・三鷹(7月15日)・松川(8月17日)事件があいついで起こったのはこうした背景と断ち切っては考えられない。このいわゆる〝日本の黒い霧〟によって共産党員や組合運動の活動家多数が職場を追われた。日本の夜はさらに長く，これだけで朝を迎えることはできなかった。翌25年には朝鮮戦争(6月25日)が起こり，28日には「アカハタ」が停刊命令を受け，政府機関，新聞報道部門，重要産業部門のすべての職場から共産党員や先進的活動家を追い出す「レッド・パージ」(7月24日)が強行された。しかも8月10日には警察予備隊が創設されるという手まわしの良さであった。

こうして第Ⅰ期に準備されたサークル運動の芽は有力な中核活動家の追放と大衆弾圧体制の下で，すっかり踏みにじられるかたちになった。昭和28年には青年学級振興法が成立し，それまでの青年の自主的学習サークルが官制化されてしまうなど，学習活動も行き詰まりの状況を呈してきた。にもかかわらず，農村の青年たちは「文化運動的なものから，社会運動的なものへ，行事が中心であった青年団から運動をつづける青年団」[4] への脱皮を意図しつつあったのである。反動的な政治の動きを目のあたりにした日本の大衆が，巷に氾濫するエロ・グロ文化からともに自分を守るための地道な運動を展開しようとしていた。この期における特徴的な動きは，農村を中心として波及した「生活記録運動」と，都市からあふれだした「うたごえ運動」とであった。両者は生活実感をテコとして，実に広汎な大衆をサークルに参加させることに成功した。それが盛り上りをみせるのは次の第Ⅲ期に入ってからであるが第Ⅰ期におけるサークルの芽生えと第Ⅱ期における社会矛盾の激化は，さらにサークル運動拡大の動因となった。

3. 第III期〔1954～1958〕

第Ⅲ期はレッド・パージによる職場活動家の追放という第Ⅱ期の手痛い攻撃から立ち直って，民主勢力がまき返しに出た時期にあたる。原水爆禁止運動における大衆意識の高揚と小選挙区制，教委公選廃止，教科書法案など一連の反動政策にたいする民主勢力のたたかいは青年，婦人など広汎な運動となって展開された。そして第Ⅱ期に芽生えたうたごえ運動は燎原の火の如く全国に広がっていった。うたごえ運動は「これを主軸として平和

友好祭，青年婦人国際交流，原水爆禁止署名運動，職場・地域のサークル活動(学習，演劇等)が信じられないほどの速度とエネルギーをもって拡大」[6] (傍点長浜) していったのである。その「信じられないほどの速度とエネルギー」を生みだしたのは青年たちであった。いいかえれば戦後におけるサークル運動の歴史は青年世代の社会参加の歴史であったともいえるであろう。世代の差によってサークル運動に対する受けとめかた，参加のしかたにはちがいがあっても，[7] 一人の百歩より，百人の一歩という仲間づくりとしてのサークルが「草の根の自己表現のいとなみ」[8] として位置づけられた時期であった。サークル運動の急速な発展とそのエネルギーが高まれば高まるほど資本家，支配階級にとっては大きな脅威であった。そのため会社の職制を通じ，両親を通じて圧力をかけたり，サークルに入っているものたちをアカ呼ばわりし，いっぽうでは，会社自からお茶，お花，スポーツといった御用サークルをつくりだし，民主勢力としてのサークルに直接ないしは間接の干渉，攻撃を加えはじめた。

4. 第IV期〔1959～1963〕

第IV期はおしなべて「停滞期」とするのがサークル運動に対する公式的定説となっている。果してそうであろうか。確かに停滞的側面をそこに見ることはできる。しかしそれは量的側面でとらえた場合でのことであって質的なそれでの問題ではない。あるいはまた消極的評価としてのそれであって，積極的評価としてのそれではない。ことにサークル理論家たちの日和見的態度によるサークル理論のジャーナリズム論壇からの退出は，あざやかともいうべき変身であった。この期のサークル運動の「停滞」というのは正確にいえばサークル理論家たちの退行であって，決して運動そのものの頽勢でもなく，また理論そのものの停滞でもない。ジャーナリズムやコマーシャリズムのラインから姿を消し，大衆の生活の中に根をおろしたサークル運動が本来の動きをはじめるのは，むしろこの期からであるとさえいってよいであろう。もちろん第III期にみられたような爆発は消え失せてしまったがそれは第一にマス・コミの奇嬌心にあおられた表面的現象であり，第二に資本家，支配階級の干渉，攻撃に対する不可避的転進[9]であった。第三にはサークル理論における対立と混迷，である。「思想が伝統として蓄積されない」とでもいう日本的論争のパターンはここにも該当される。[10] 結局のところ，サークルとは何か，ということが最初からくり返される非生産的労働をやらざるをえないということになるわけである。

第一は問題とするに足らないが，第二，第三の問題は吟味する必要があるように思う。[11] ただここでつけ加えておくとすれば，この期のサークル運動の反省として実践の側から提起されたつぎの話である。「これまでのサークル運動は状況のやわらかな部分をほり進んで，政党や労組の手のとどかない領域を開拓してきたわけだが，したがってその成長はたぶんに気楽な任意性の上に立っていた。」それゆえサークル運動のより高い発展のためには，現段階をこえる目標を求めなければならない。サークルに対する不当な干渉・攻撃という不利な状況，それはサークル運動に固有な矛盾である。「状況が不利であるとき，その不利な条件を逆手にとって新しい表現と組織のスタイルを生みだしえない運動は思想や文化の範疇にはいらない」[12] 今こそサークル運動はその真価を試されている，そういう認識が広がりつつあった。そういう文脈のうえでのみ「全体としての社会情勢の変化は，ブルジョア民主主義が目標でありえた段階のサークルから，その限界に達した地点で，民主主義を守るべき段階へのサークルへと，質的な転換をせまられている」[13] というサークル理論を理解することができるのである。

5. 第V期〔1964～現在〕

第V期は特色あるサークルが定着しつつ，量的発展を志向する潜在期である。第IV期におけるサークル運動の質的発展はこの期に入って，安保体制下の中でのたたかうサークルを育ててきた。たたかうサークルの多くは政党，組合組織の中に位置づき，その拡大された方向がさらに大衆運動へと結びついた。反面では政党・組合への定着化の意味するものが，量的減少をともなっているとも指摘できる。政党や組合内におけるサークル化は質的向上は望めるとしても量的増加は第III期の比ではない。したがってこの期における問題の一つは，いかに量的拡大をとげるかということである。いいかえればいかにしてより広汎な大衆との結合をはかるかということである。いま一つは，この期にはじまったことではないが，未組織青年労働者の没価値的親睦サークルの群生という問題である。それはたとえば「若い根っ子の会」に代表されるような心情的人生派とでもいうような，グチのこぼし合いに終始し，非政治的・宗教的であることを誇りとするようなサークルが，この期に著しく増加している。[14] こうした没価値的青年集団は「期待される人間像」にまったく傾斜するかたちでますます増えていく見通しである。その意味で，この期のサークル運動はまがり角に立たされているといえるであろう。そのためにはサークル運動のこれまでの状況を形態的外在的な分析にまつばかりではなく，サークル運動の原理的内在的な視点にまでたちもどって考えていく必要がある。次節では運動の具体的な局面をうたごえ運動と生活記録運動を通して分析

していくことにしたい。

第2節　二つの運動における具体的分析

1.　うたごえ運動

うたごえ運動の出発点はどこにあったか。乱暴ないいかたをすれば，うたごえは，合唱を楽しむ青年達ばかりで組織されたり，みずから組織して出発したのではなかった。当時うたごえ運動推進に大きな位置を占めていた林光は，うたごえ運動をふりかえってつぎのように述べている。

「彼等(註＝うたごえに参加した人々)はただ歌をうたうという全く資本のいらない集団行動に参加することによって一時的にもせよ，生理的また心理的に解放されようとして，すなわちもっとも単純な方法で『疎外』に対してたたかいをいどもうとして集まったのではないか。だから一般的な問題としていえば，必ずしも合唱あるいは歌，つまり音楽でなくともよかった。ただ，社会的なまた同時にその中での音楽的な状況は『歌』にそのような可能性をあたえたのではないか。……歌による自己主張を通じて歌うことの楽しみを，というコースをとったところに，うたごえ運動の決定的な新しさと意味があった。」[15] (傍点長浜)

こうした見方はうたごえ運動の本質を必らずしも射ていないが，当時の社会的状況が青年を中心とした国民大衆の中に，サークル運動の熱い期待をよせ集めていた一般的な雰囲気を伝えていると思う。うたごえ運動はそういう意味でサークル運動を国民大衆に波及させる先駆的役割を果したといえる。「それは，かって日本の大衆は歌をうばわれていたという音楽的な情況にとどまらず，なにによらず主張する自由をうばわれていたという社会的情況にまでさかのぼることができる」(傍点長浜) と林光が述べているように，まさに歴史的，社会的な階級性に根づくものなのであった。ところが，いつのまにかうたごえ運動はそうした階級性を捨象し，大衆の文化的欲求のレベルに下降させてしまい，根無草的評価にすりかえられるようになった。たとえば高木宏夫は「うたごえは思想を育てる運動ではなかった上に，サークル指導者は技術的な向上を運動の発展ととらえていたために，思想的な要求や人間性の変革を求めて加わった人たちは，うたに終始するサークルにあきたらず，サークルから離れるか，またはそれを自分たちの要求を充すサークルにつくり変える結果となった」[16] として，うたごえが大衆を広くとらえた事実そのものを認めていない。うたごえ運動は，他のサークルにおけると同様に大衆のプリミティヴな，生活実感を基軸としたからこそ，広汎な支持をうけたのであって，そこをふまえない評価はおよそ意味をなさない。

うたごえ運動の歴史をひもといてみると，非常に特徴的なことはレッド・パージによる中心的活動家の追放がさほど影響していないということであろう。これは，うたごえ運動が広く大衆に強い支持をうけていたことを如実に物語るものである。少数の指導者によって運営されるというそれまでのサークルの公式を打ちやぶるような形で，いわば新しいサークルの方向をうたごえ運動は準備したといえる。

うたごえ運動を自然発生的にできたものとする傾向が一部にあるが，それが誤まりであることは，うたごえ運動の前史をみるだけではっきりする。うたごえ運動がさかんになる背景には計画的に見通された文化政策が当時あったことを忘れてしまえば，うたごえ運動は必然的に自然発生説に還元されてしまう。1948年2月，東京の共立講堂で数十名の青年たちが「青共中央合唱団」を創立した。これが，うたごえ運動の礎石となった。逃避的，頽廃的文化の氾濫は，人間らしさを求める文化と娯楽の必要性を大衆に広く渇望させたがいち早くそれを文化政策に反映させたのは日本共産党であった。戦前にサークル理論を提起して大衆の芸術組織づくりの重要さを説いていた蔵原惟人はこの年に，うたごえの基本路線ともいうべき見解を発表している。それは，支配階級による大衆への反動的，逃避的文化政策を批判し，大衆に自分自身の生活を向上させようとする革命的意欲を起こさせるために，率先して新しい文化運動を進める必要がある「しかし，そのためには，狭い意味で闘争に直接役立つ文化だけではきわめて不十分である。たとえば毎日，赤旗の歌だけを歌っていたのでは大衆はあきてしまい，逃避的な頽廃的な流行歌の方へいってしまうであろう。だからわれわれは生活や，労働と結びついた健康なしかも大衆の欲求を充たすような楽しい歌曲を大衆の間に普及しなければならない」[17] というのであった。

民青中央合唱団はこうした文化政策の具体化であった。その行動綱領はつぎのようにうたっている。

1.　われわれの合唱団は長い間の封建制と軍閥主義の打破のために全日本の青年とともに歌う
1.　われわれの合唱団は新しいファシズムに対抗し，生活の喜び，団結の美しさ，明るい未来の確信を伝えるために歌う
1.　われわれの合唱団は低俗な流行歌を駆逐し，闘いの中から民族の歌をつくり出す
1.　われわれの合唱団は青年戦線の統一のためにうたごえを拡大し，職場，農村，学校などあらゆるとこ

第2表 うたごえ運動関係小史

区分	年	月	小史	補足
準備期	1948年（昭23）	2	• 青共中央合唱団創立	• 青年共産同盟結成2周年記念40名でスタート，共立講堂
		7	• 勤労者演劇協同組合（労演）結成	• 千代田生命講堂，1949年2月に大阪労演結成
		8	• 中央合唱団関西公演，関西合唱団誕生	• 初の地方公演，これがきっかけとして名古屋，京都，神戸にあいついで合唱団結成進む
		11	• 中央合唱団東宝争議支援	• 「こなかったのは軍艦だけ」民主的集会でのうたごえ普及に努力
創設期	1949年（昭24）	2	• 青年歌集普及「バイカル湖のほとり」「カチューシャ」など流行	
		10	• 「民青中央合唱団」発足，機関紙〝うたごえ〟発行	• 青年共産同盟の発展的解消による改編，民青団創立
		11	• 関西勤労者音楽協議会（労音）	• 朝日会館，1950年8月大阪労音と改称
	1950年（昭25）	2	• 中央合唱団2周年記念「平和大音楽会」	• 日比谷公会堂，職場合唱団150，参加3,000名
		7		• レッド・パージ，うたごえ運動活動家職場追放うく
		11	• 「中央合唱団」発足	• 民青中央合唱団より独立
発展期	1951年（昭26）	7	• 音楽センター完成	• うたごえ運動の本格的拠点
		12	• 中央合唱団3周年記念「美しき祖国のために」	
	1952年（昭27）	12	• 中央合唱団4周年記念「日本のうたごえ」	• この年「若者よ」流行
			• 第2回全国合唱団会議	• うたごえ運動の大衆路線を確認
	1953年（昭28）	10	• 東京労音結成第1回例会	• 1955年第1回全国労音連絡会議（大津）
				• うたごえ運動，急速にひろがる

ろに歌う集団をつくる

1. われわれの合唱団は民族の独立と自由と平和，民主人民政府の樹立のために歌う

その後，1950年，民青中央合唱団は中央合唱団と改称，民青団から独立し，翌51年の音楽センターの完成によって，うたごえ運動は発展期に入る。ここで問題となるのは，うたごえ運動の発展が(1)民青団からの独立と(2)音楽センターの完成，および(3)大衆路線の設定によって可能になったといわれることである。[18] このことが全面的に正鵠を射ていないとしても部分的には正しいと思う。しかもそれはサークル運動にとって本質的な問題である。それはさきの合唱団綱領に見られるような基本方針がなぜ大衆にうけいれられないか，という事に直接結びついているからである。もっと平たくいえば，方針は正しいとしても大衆がこれを支持しなければ問題にならないという事である。したがってここで問題となるのは，方針の再検討よりも，大衆のそういった態度，意見そのものである。サークル運動を評して，戦前には目的・性格が明確だったが，戦後には無性格・無目的であるという見方が一般的であることはすでにみてきた。しかし，うたごえ運動の歴史をみてもわかるように決して無目的・無性格ではなかったのである。大衆が政治的文脈から切り離された地点でようやくついてくる，そういう状況がうたごえの中に存在したということは，うたごえ運動がただ生活実感に依拠していればよかったということになるのだろうか。決してそうではあるまい。感性的認識から理性的認識へという図式はサークル運動の場合，生活実感から「歴史化的現実認識」（上原専禄）という経過をめざしている。「歌による自己主張」はまさにその具現化であった。生活実感——文化要求，日常性のレベルと歴史化的現実認識——価値選択水準，政治的水準とは全く相入れないものなのかどうか，という難問をうたごえ運動は解決できなかった。[19] 専門家が出ないとか，暗譜で読めるとか，声がいいとか悪いとか，そんな次元の論議のほうに比重がかけられて，本質的なこちらの問題は誰もが避けて通ってしまった。

うたごえ運動が全盛期を経てたどった道は商業化（流行歌手による超通俗化）とタコ壺化（うたごえ喫茶におけるウサばらし）であった。労音はうたごえ運動推進の強力な支援団体でもあったが，創造的活動は次第に影をひそめ，大衆鑑賞団体へと変容をとげていく。うたごえ初期のスローガン「うたは闘いとともに」は深刻な労働者階級の闘争のなかですぐれた土着の歌を生み落とすが，日本の空をおおう歌は，頽廃の極みをゆく「奴隷」の歌であり，「軍歌」に変ってしまうのであった。実感が理性とならず，矛盾が怒りに転化しないこの問題を，うたごえに求めることはできなかったが，同じ時期にサークル運動として広まった生活記録運動はどうであったか。

2. 生活記録運動

生活記録は戦前からの児童の認識を深める教育実践として続けられてきた生活綴方を青年，婦人等働らく者の側からとらえなおそうとした運動であり，端的にいえばおとなによる「人間改造の自己教育の方法」[20] として展開された運動である。この運動は昭和26年，無着成恭の「山びこ学校」が出て以来，[21] 急速に生活記録サークルの中にとりれられてゆくが昭和20年にはすでに栃木県

の大内村のサークルの生活記録文集「紺碧」があり，昭和21年には山形県長瀞村の青年たちの実践，昭和23年には山形県若木部落の開拓地青年による生活記録や学習活動のあとがみられる。しかし，実質的に生活記録を軸としたサークル運動が進展するのは，やはり昭和26年を境として考えるのが妥当であろうと思う。

生活記録は「おとなが，自分の感じたこと考えたことを，ほかの人びとに伝えるために，その感じや考えの発生のきっかけとなった事物を，借りものでない自分自身の生活のコトバで，具体的に書いた文章である。そしてそれは自発的に形成された小集団のなかで，持続的に書かれることが本来の形である」[22]すなわち個人の実感を集団の中で客観的なものにつくりかえていくプロセスを生活記録は大事にする。その意味で，生活記録はうたごえとかなり共通の性格をもっている。しかし決定的に違うのは自己表現の仕方が前者では認識＝価値選択のルートを必らずくぐり抜けるのに対して，後者はこれを省略できるということである。つまり，うたごえは感性的情動表出のみで済ますことはできるが，生活記録は個人の思想を濾過せずにはおかない。

したがってうたごえ運動が未決の問題として残したもの，実感の理性的転化（＝科学的認識），矛盾の怒りへの転化に至らしめるメカニズムを，生活記録は原理内在的に含んでいたということができる。このことはサークル運動にとって本質的な問題である。「実感から法則へのあいだには，抽象度，普遍度の限りない段階に応じた媒介原理（プリンシピァ・ミィディア）の連鎖があるはずである。生活記録の側から普遍的な認識に収斂する方法は，具体的な状況に応じてもっとも適切な媒介原理を発見し，それをしだいに抽象度の高いものに積み重ねていくことだ」[23]という言葉は，確かにもっともであったが，ここにいう理論的積み重ねが行われなかったところに生活記録の不運があったといわなければならない。

昭和27年，鶴見和子を中心とした「生活をつづる会」の誕生，東亜紡織泊工場労組婦人部の『私のお母さん』この発刊の過程で「生活を記録する会」の発足。[24]昭和29年「生活をつづる会」のなかに『ひなたグループ』が誕生。鶴見和子編『エンピツをにぎる主婦』（毎日新聞社），国民文化会議準備会編『日鋼の母と子ら』，全織同盟教宣部編『解放の歌高らかに』（近江絹糸人権闘争の手記），昭和30年日青協に生活記録研究会発足『生活記録運動』の創刊。これらは生活記録運動が生んだすぐれた産物であったが，その裾野には実に無数の生活記録サークルが書き，話し合いながら活動を続けていた。その雰囲気を埼玉県のあるサークルはつぎのように伝えている。[25]

「おらあ，生活記録を書くようになってから，おやじに〝おめえはこのごろ質素（じみ）になったなあ〟といわれたが，いままで，よく見にいっていた映画もあんまりいかなくなったよ」

「いいかげんに，ものごとを考えなくなったよ。なんでも真剣に考えるなあ。近所のばあさんに〝新ちゃん，おめえこのごろ理くつぽくなったなあ〟といわれたが，おらあ，そうは思っていねえ。おれが書いた生活記録を，みんなで考えあってもらうと，おれの考えのまちがいもわかってくるし，世の中のムジュンもわかってくるからなんだよ」

「ぼんやりしていたんじゃ，書けないものね。その時のことを，ようく思い出さなくっちゃならないし，書いているだけでも，ずいぶん考えさせられるもの」

このサークルの場合，話し合いからやがて生活記録へと移っている。実際，多くの生活記録サークルは話し合い→生活記録，あるいは読書会→生活記録というルートをとっている。このことは，話し合い，つまり情緒的表出を一歩進みでたところに生活記録サークルが位置づいていることを示している。個人的表現——集団討論——矛盾の把握——解決のための方策というサイクルの中に生活記録運動があるにもかかわらず，このサイクルは完結しなかった。それにはいろいろな理由をあげることができる。大別すればそれは次の二つの理由からである。

第一には，民主的勢力の結集に必然的につきまとう資本家，支配階級の弾圧，攻撃。第二に生活記録をとりあげた文化・知識人の否定的，悲観的意見。これは生活記録運動の最大の伏兵であった。生活記録は反封建にはよいが，反独占ではだめだとか，[26]生活記録は文学ではないとか，実感主義は役に立たないあるいは万人を感動させるものを書けなどといったありとあらゆる無責任な放言が行なわれた。生活と理論の橋渡しをする「媒介原理」も何もあったものではない。生活記録の停滞が文化・知識人によっているということは，さきのうたごえ運動が大衆の側に主たる停滞原因があったのと対照的である。

中には高木宏夫のように，生活記録の停滞は生活綴方の手法，つまり教師（指導者）と児童という関係を無視したからだという単純な見方をする人もいる。氏にいわせるとそのような方法が「大人にもちこまれて，指導者もなく，ただ書いたものを持ちよって話しあう」[27]のでは停滞もあたりまえ，ということになる。いうまでもなく，こういう見方は生活記録運動に対する認識不足であって取るに足らないといえようが，生活記録がたかだか数十名の仲間に読まれるのに対して，こういった無責任な評価も単に言論人であるということで強大な悪影響を実践

家たちにあたえるのである。

とくにサークルという大衆の組織にとって文化・知識人が与える影響は大きい。それだけに運動に対する批判や意見は慎重であるべきであろう。彼らの多くはあまりにも無神経，無責任に大衆拝跪と蔑視の両極を楽しんでいる。「母の歴史」や「私のお母さん」などすぐれた生活記録運動を実践していた沢井余志郎が怒りをこめながら「生活記録サークルは，すでに前からあった芸術をうけついでより発展させるというものでなく，自然発生的にといえるありふれた人間的な人間たちの素朴な運動であり，その人独自の解釈のもとに早急に断定した論評が実践運動にとってどういう悪影響を与えるか——受けとるサークルにも問題はあるが——もっと考えられていいことではなかったか」と語ったのはけだしもっともなことであった。[28]

サークル運動と生活記録運動における哲学は同一であるとして，その中に(1)戦後的な近代化方式を批判する態度(2)状況主義(3)平等主義(4)善意と受容の哲学，そして(5)実感主義を見出したのは鶴見俊輔であったが，[29]とりわけ最後の実感主義は生活記録における基本的手法としての，見たまま，感じたままを表現するものであるという，その生活記録運動の中心原理が賛否両論の中心になった。それは主として昭和30年代に展開されるが，[30]サークルに直接かかわってなされたものは少ない。昭和30年代，とくに昭和33年前後は生活記録運動，うたごえ運動の定着化，裏返せば固定化しつつあるまがり角であった。少ないながらもこの時点での実感論争はサークル運動のいっそうの固定化をおし進める役割をはたした。たとえば文芸評論家の肩書きをもつ江藤淳は，一般大衆が生活記録を書くのは結構だがそのようなのろい歩みで，世の中の情勢についていけるかと疑問を投げかけ，生活記録的手法による思想のつみ重ねは無意味だろうと述べたし，大江健三郎は，「鍛冶屋が鎌を作ることについて生活記録を書いたものと，小説家が鎌を作ることを書いたものとどちらが実感があるかというと，小説家の書いたほうが実感がある」とまでいい切った。[31]画家が杉の木を描くのと，写真家が杉の木を撮るということの中に実感はない。生活記録における実感というのは美学的立場から選ばれたある特定の杉の木を間接的に表現しようとするのではない。美学的に無価値であろうと否とにかかわらず，大衆の実感は杉の木すべての中にあるそのものなのである。生活の中に育くまれ培われてきた実感は，大衆の土着の思想の根源である。この根源があるからこそ，大衆は労働者階級としての自覚をもちうる可能性を潜在させているのであり，たくましさを持っているのである。サークル運動は実感に裏付けられている。文化・知識人はすぐさま科学的客観主義的重要さを強調するが，実感を否定する所に大衆の科学性や客観性は育たないであろう。そういう文化・知識人の科学的態度のなんと根無草のことであろうか。大衆の側における「理論不信」を果てはマルクス主義者の責任に転嫁してしまう「日本の知識人」[32]には根底的な存在追求が必要なように思われる。

第3節　サークルと学習

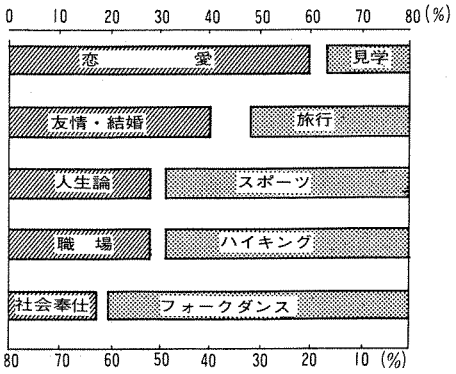
これまでサークル運動は，いわば大衆組織の運動的側面としてとらえられてきた。いいかえれば組織の拡大と運営に関する局面が中心となってサークル運動の実践的あるいは理論的課題が提起されてきたといってもいいと思う。しかし，サークル運動が大衆にその基盤を置き，大衆の組織化に有効な力をもっていることが検証された現在，われわれはこの遺産をさらに内実あるものにしていかなければならない。その意味でいえばうたごえ運動と生活記録運動の残していった実践の理性的転化（＝科学的認識）と矛盾の怒りへの転化過程を明らかにすることが重要な問題となってくる。実感をそのまま冷却して科学的認識にすることが最善とは誰も考えないし，矛盾を怒りに変えることが解放感情とどの程度結びあうのかという非生産的論争はこの際きっぱりと捨てて，大衆のサークル運動への主体的参加の方法と内容を中心とした追求を行なっていったほうがよいであろう。その過程は必然的に実感の科学的認識と矛盾の解放感情転化を前提としなければならない。

国民の自己形成としてサークル運動を位置づけたのは社会教育の分野においてであった。すなわち昭和28年の青年学級振興法の強行成立による青年学習集団の官製化は青年の学習意欲を型にはめ，学習活動を沈滞させたが，青年たちによる学習集団への主体的参加の情熱は共同学習運動の形をとって進められた。[33]形式打破，形骸化打破をめざした青年たちの新しい共同学習運動は，サークル運動へと合流していく。ここでサークルは初めて「学習」という要素と直接に結びあうことになる。それまでサークル運動はメンバーの意識の変容過程とか，サークル運営における学習内容のプログラムとかについては無関心であった。とにかく人が集まって，人間解放の機能を果たしているだけで満足し，内容や方向はやっているうちにみつかるというプラグマティックな風潮があった。したがって実感主義から出発したサークル運動は，実感から外れたコースの問題には目もくれないという弊害もうみだす。愛情，友情，レクリェーションの話

第3表　政治問題のかかわりかた　(昭41)

扱い方	サークル数
1. 問題によってとりあげる	14
2. 世間から色メガネでみられるからかかわらない	0
3. 政治は生活とあまり関係しないので扱う必要はない	3
4. 密接な関係があるので自分たちの問題として積極的に扱う	1
5. よくわからない	2
計	20

第2図　サークルでよろこばれるテーマと行事 (昭41)



には飛びつくが，政治や思想の問題を敬遠するというのはそうした風潮のあらわれとみることができる。親睦を中心とした青年サークルでみた場合，たとえば政治問題の扱い方をきくと「サークルは政治活動ではないが，問題によって話合うようにしたい」というのが圧倒的に多い。しかし中味の問題できくと，殆んどとりあげていないというのが実情である。[34] そのことは，たとえばサークル構成員の嗜好をみるといっそうよくわかると思う。(第2図) ここでみる限りでは，サークルに集まる大衆はきわめてプリミティヴな実感主義に裏づけられているということになるであろう。事実は確かにそうなのだ。しかしサークルの実感主義を否定する人たちは，そういう文脈で反対するのであるが，大衆における実感否定は，大衆のすべての認識ルートを断ってしまうということに，この人たちは気づかない。人はパンのみにては生きるものにあらず，であるが，大衆はパンに生きることを求めて旅立つ。そこに大衆の強さも弱さもすべて集中している。[35] 実感といってもそこには直接的実感と間接的実感とがある。国民の権利であるべきはずのデモに出て逮捕され手錠をかけられる直接実感とそれを目撃したり，伝聞したりする間接実感がある。いずれもそうした実感が起爆力となって大衆の科学的認識への道が開かれる。映画や書物を通して得られる働らく者の心の中に通じ合う間接実感によって，大衆は学習しつつ自らを変革していく。問題はいつまでも実感のレベルにとどめない，ということである。実感がいけないというのではなく，実感の理性的転化，すなわち科学的認識へ高めていくその方法と内容についての理論的作業を進めていくことが大切である。その理論的課題は現実に運営されているサークル運動の実践過程に求める以外にない。

サークル運動の学習的側面をとりあげた社会教育では，これを小集団学習としてとらえていった。社会教育研究者ばかりではなくいわゆる小集団論を展開してきた社会学者の中にも，サークルにおける学習的側面の吟味の必要性を説く傾向が生まれてはいたが，[36] これを主要課題としてとりあげたのは，やはり「小集団学習論派」であった。それは日本社会教育学会編『小集団学習』(1958年) 宮原誠一編『青年の学習』(1958年) 宮原誠一『青年期教育の創造』(1962年) で中心とする小集団学習の本質と問題を解明する一連の労作に集約的にあらわれている。

社会教育がサークルを小集団としてとらえ直したのは，機能主義に還元してしまう社会学派の亜流を求めたということではなくて，サークル活動ないしサークル運動における活動的・運動的機能から脱却した学習的側面をその中に積極的に重視したゆえであるとみるべきであろう。実際，社会教育の対象としての学習集団は公教育としての形式を整えた「青年学級」「婦人学級」「青年団体」「婦人団体」などがおもなものであったから，インフォーマルな形のサークルが行政社会教育の中に入ってこない場合が多かった。したがってサークルという形で社会教育の対象集団を規定することはかなり困難であった。それよりも青年学級や婦人学級の中にサークル性を発揮させる方途を見つけだすことが，より現実的であった。そこでサークルは運動的機能と学習的側面が一つの線に結ばれる条件をもつことができたのである。

実感の科学的認識に至る媒介原理を追求するという真向からの気迫は社会教育にも見られなかったけれども，サークル運動の固定化打開の道をいち早く，学習をモメントとするところに焦点をあてていたことは注目に価する。サークルを，青年の正当な要求をあきらかにし，その要求をはばむ状況をつかみとるための「有効な学習活動の一つの方式にすぎない」として，それのもつ弱点を千野陽一はつぎのように指摘している。[37]

(1) いつでも，だれでもひとことはしゃべってもらわねばという，みせかけの平等主義が学習内容に優先しているという問題

(2) 客観的認識にまでふかめねばならない重要な問題も集中的には討議されず，問題深化への動機が挫折

してしまうという問題

(3) 公式的に〝仲間のなか(のみ)での話しあい〟だけが強調され，ひとりで考える個人学習の軽視，安易で浅薄な集団討議の偏重が助長されているという問題

(4) ひとりの脱落者もないようにという配慮から個人の興味をくすぐるような低俗な内容から内容にながれるという問題

(5) 〝一人が百歩進むより百人が一歩〟という言葉が卑俗化・矮少化されて利用されるという傾向としての問題

サークルにおける学習の結合は，いってみれば，ここに提起された問題の裏にあった。(1)から(5)に至る問題の共通項として，小集団学習論派があげたのが「指導者」の問題であったことは，自然な帰結とはいいながらも重要な着眼であったといわなければならない。だいたい昭和30年代のサークル理論はプラグマティックな影響を強く受けており「サークルそのものの生命ははかない。在るものはただ，そこに寄り集まるものに共通の期待と共通の目的だけ」であり，サークルは「燃焼する意欲でそれを支えている人たちだけのもの」であって「その意欲が燃えつづけているあいだだけのもの」[38]というサークル論が横行していたから，指導者論の生まれる余地がなかった。宮原誠一が「すべてを大衆の創意としてえがき，指導者の役割をゼロにしておくサークル論やサークルの実践記録には，善意はあっても誠意が不足している」[39]と批判の口火を切ったのは，けだしもっともであった。宮原は，サークル運動の行きづまりをサークル自体の論理からいえば，サークルにおける指導性の無視ないし軽視に最大の原因があるといい，指導の体制をリーダー，活動家，チューターの三者の役割分担に求めたのであった。さらに年齢段階に応じたきめ細かい指導の重点を説いて，サークルにおける学習への水路づけを積極的に試みている。[40]

宮原誠一の場合，これを単に理論的次元にとどめることなく，実践的次元において検証しようとしたところに，これまでの理論家にもなかった両者の統合を目指す新しい姿勢があった。それは昭和35年に開設された信濃生産大学であり，冬季と夏季の農閑期を利用した三泊四日の合宿セミナーに定員60人，県下の先進的農業を営んでいる「精鋭青年」を結集して，徹底的な討論学習を行ない，ここで育った青年を県下の「全サークルに環流」させるねらいをもつものであった。それは「農村青年の学習運動を実践にそくした生産学習と政治学習との結合という方向に発展させるための手がかり」[41]といっていることにうかがわれるように，これまでのサークル運動に対する慎重な反省をふまえた，新しいサークル運動への転換的視角の提起であった。信濃生産大学は6年の短かな歴史ののちに，自治体の援助から独立して，信濃労農大学に移行するが，この「戦後社会教育実践史にのこる歴史的経験」[42]は昭和42年8月の「信濃生産大学解散声明書」に総括されている。この中で声明書は「地域における日常的なサークル学習・市郡単位のセミナー・全県レベルの生産大学という三重構造の学習運動組織があみだされたこと」「生産学習と政治学習の統一が実現されたこと」「つねに事実と調査から出発し，定量化しうるものは数字でしめし，経験をたいせつにすることをとおして理論化にすすむ作風が確立されたこと」「理論学習——実践——より高い理論学習——より高い実践のサークルを生みだす方式がこころみられたこと」「討論と講義とを動的に組み合わせ，討論の密度を濃密にしていく学習方法が工夫されたこと」および「数箇の小集団のそれぞれに社会教育の専門リーダー，農民リーダーおよびチューターとしての学者を配することによって小集団討論の効率を高め，この方式の有効性を実証したこと」[43]と述べ，サークルと学習の不可分性を証明するとともに，両者の相関的結合効果の重要性を実証したのであった。[44]

サークル運動における学習による水路づけは簡単な図式や方程式では解きあかせない複雑な要因がある。宮原方式は，リーダー，活動家，チューターの配置体制の中でこれまでみてきた成果をあげることができたので，すべてのサークル運動にこの方式の切り換えは適用できない。そこに今日における〝サークルと学習〟の未決の問題がある。「先進的」青年が集まった小集団は目的意識的に動くことができるが，サークルは誰でもが，どこでも，いつでも作る権利をもっている。そのためにも目的意識的性格をもたない無志向的サークルは学習と切り結ぶ接点をどこに求めうるか，という課題にも答えなくてはならない。藤岡貞彦が「50年段階のように，サークルを学習の基本形態とするのではなく，教授主体たる専門家と学習主体(勤労人民)が対等にむかいあい考えあう教授＝学習の過程(それは科学⇄生活の関係とパラレルである)が必然に重視される。その一方，実感を科学の論理にすえなおすために『調査』と『現地報告』が教育方法としてて不可欠になった。そしてこれら教授・学習・調査の全構造を保証する組織論を考え」[45](傍点原文)る段階として70年段階の展望を行なっているのは，生産大学のレベルにおいてのみいえることで，いわゆる目的意識をもたない無志向的大衆のレベルにはほど遠い理論

であるといわざるをえない。70年代の国民の自己教育の段階は，「勤労人民」のレベルではなく，正しくは，大衆から勤労人民への転化の論理を生みだすことにある。いいかえれば矛盾の無風地帯における大衆の未体系としての思想を科学的認識のレベルに転化しうる論理をさぐりあてることである。その意味でうたごえと生活記録は，いわば転化の論理を検証する格好の場となっていると思う。それはこれまで部分的ながら検討してきたところであるが，改めて総体的な視角からいえば，つぎのような理由からである。

第一にうたごえの停滞は主として大衆自身の側に内在的にあったということ，このことは生活実感から一歩先に進み出るための峻巡が，外からの状況というより，うたをうたう側にあったということを意味する。もちろん外在的状況を無視ないし軽視するのは誤まりであるが，うたごえに関する限り，比重はうたう主体に多くかかっている。つまり，うたごえは，なまの形での自己表現をとっていたわけであり爆発的な大衆への波及はとりもなおさず，そこに帰因していた。大衆における未体系としての解放の思想は，まずそれがいかなる原初的な形にせよ，ひきだされる契機をもつことである。極端なことをいえば，どんな側面からでも，それが屈曲し，沈澱している大衆の解放思想を解きはなつ契機は大事にしなければならない。だから，うたをうたうことでなまの自己表現をかちえたということは，それだけでは決して評価できないが，(46) それをひきだしたということでは一つの発条を大衆の中に据えたという点で正しく評価しておかなくてはならない。その意味でうたごえが実感（＝感性的認識，なまの自己表現）から科学的認識への転化の媒介原理をうみだしえなかったということは，八方に責任を転化させるよりも運動をすすめる主体であった大衆自身にその原因を求めていったほうが示唆される点は多いように思われる。

第二に生活記録の停滞でいえば，その原因はむしろ大衆をとりかこむ外在的状況に求められるということである。生活記録はなまの自己表現というより文字という個人の思想のフイルターを媒介とした自己表現であり，大衆の未体系としての思想表現のいとなみであったから，実践→科学的認識のサイクルはうたごえよりはるかに近いものであった。ところが，このサイクルを結ぶものとしての期待をかけられていた文化・知識人の意外な否定にあってしまった。それはまったく大衆の期待にそむいたばかりでなく，いわばサークルにおける大衆の思想形成の営為に対する冷ややかな嘲嗤とでもいうべきものであった。大衆がこうした文化・知識人の態度を，大衆自身への挑戦としてとらえる力があれば問題はなかったが，日本の大衆は当時そこまで成長していたわけではなかった。媒介原理のルートをなくした大衆はまたふたたび自分の栖家にもどっていくしかなかった。

こうしてみてくると，うたごえと生活記録は，今日のサークルに対するきわめて重要な教訓を遺しているように思える。すなわち，うたごえと生活記録が残した停滞と行き詰まりの要因を双方に共通な問題としてとらえなおして，今日のサークル運動の水準に活かしていくことである。そうして，おそらくそのための基本的原則的な筋道は，大衆自身が，生活実感から科学的認識への媒介原理をみつけだしていくということ以外にはないであろう。それは部分的にサークル運動の中での学習との結合という形をとって現われてきつつあり，この方向は今後ますます重視していくことが必要なように思われる。その意味で社会教育研究の主要な課題は「大衆から勤労人民への自己形成」の過程と方法を明らかにしていくことにある，といえるであろう。

〈註〉

（1） 1950年までの知識人論争として田辺元「知識階級現在の任務」『潮流』1947年 2•3月合併号，大河内一男「中産•知識階級の行方」『中央公論年』1947年3月号，宮本百合子「文化生産者としての自覚」『評論』1947年3月号，戒能通孝「インテリゲンチヤの陥没」『評論』1949年12月号などがある。知識人と民衆との間の亀裂をリアルに描きだしたものに飯塚浩二編著『日本の軍隊』東大出版部1950年がある。

（2） しかし，このことはあくまでも「示唆」であった。知識人と称される階級がなしえたのは疎開地におけるサークルへの参加に限られ，都市においてはみるかげもなかった。こうした知識人の態度は今日に至るも解決されているとはいえない。地方にいてサークル運動を実践していた谷川雁が「大衆に向っては断固たる知識人であり，知識人に対しては鋭い大衆」（「工作者の論理」『思想の科学』1959年1月号）を期待したのは，この文脈において理解しうる。

（3） 木下春雄「農村のサークル活動」『青年の学習』国土社 1960年 171ページ

（4） 長野県下伊那郡青年団史編纂委員会編「下伊那青年運動史」国土社 1960年 164ページ

（5） その意味でサークル運動に生活記録とうたごえが占める位置はきわめて大きい。その具体的検討は本章第2節に譲る。

（6） 石原慎三「労働運動と戦後世代」『思想』1959年7月号 29ページ

（7） つぎに述べられているエピソードは世代差のちがいを端的に物語っている。「東京都内のある職場（50人ぐらいの店）で湖畔に一泊のキャンプにいったときのことである。27•8歳の旅行会の世話役をつとめたグループが，かって自分たちが仲間づくりしてきた体験の上にたって夜遅くまで身の上話からはじめて種々話し合いをしだしたところ，昭和10年生れ以降の若い婦人層から『もう寝ましようよ。私たちは明日の朝早く起きてボートに乗りたいんだから』と逆襲されたという。戦後世代の1期生（註＝昭和5〜7年生まれ），2期生（註＝昭和8〜10年生まれ）にとっては，月夜のもとでの話し合いを通して共感を通わせ，仲間を感じあってゆたという喜びがあるのに，3期生（註＝昭和11〜15年生まれ）たちは，もし必要なら話しあいは太陽のもとでもできる，何も疲れた体を無理して夜おそくまで語りあうことはない，と主張する。情緒的な方法によってサークルを形成したり，自己の解放感の糸口を見つけるというやりかたは第3期生にとって必要ないのである」（高田佳利「ホワイトカラーの戦後世代」『思想』1959年7月号 43ページ）必らずしもこういう見方には賛成できないが，サークル運動の一定の進展のなかでのこうした世代間の差異はほほえましいと思う。

（8） 佐々木斐夫「新しい文化の創造」講座『社会学』第7巻 東大出版会

1957年 223ページ

(9) この言葉はきわめて便利な用語である。サークルの今日的課題の一つは，権力からの攻撃に，どのようにしなやかに抵抗していくかという，いわば「転進」の姿勢にあるといってもよい。

(10) 「思想が対決と蓄積の上に歴史的に構造化されないという『伝統』を，もっとも端的に，むしろ戯画的にあらわしているのは，日本の論争史であろう。ある時代にはなばなしく行われた論争が，共有財産となって，次の時代に受け継がれてゆくということはきわめて稀れである。……自由論にしても，文学の芸術性と政治性にしても，知識人論にしても，歴史の本質論にしても，ある時間的間隔をおいて，くりかえし論壇のテーマになるというだけではない。思想的論争にはむろん本来絶対的な結末はないけれども，日本の論争の多くは……けじめがはっきりしないままに立ち消えになってゆく。そこでずっと後になって，何かのきっかけで実質的に同じテーマについて論争が始まると，前の論争の到達点から出発しないで，すべてはそのたびごとにイロハから始まる」（丸山真男「日本の思想」岩波『現代思想』1957年 第11巻 6ページ 傍点原文）氏も含めた理論家集団が自分自身にこの意味をつきつけたことがあったのだろうか。

(11) 第3章を参照されたい。

(12) 谷川雁「サークル運動の現在地点」『文学』1959年6月号 97—98ページ

(13) 高田佳利「サークル運動の停滞を破る」『思想の科学』1959年7月号 24ページ それにしても かなり時代おくれの 転換論であることには変りがない。

(14) 拙稿「青年サークルの現状と問題点」『月刊社会教育』国土社 1966年5月号

(15) 林光「創造的音楽サークルをめざして」『文学』1959年 10月号 46—47ページ

(16) 高木宏夫『日本の新興宗教』岩波新書 1959年 50ページ 概ね氏のサークル運動に対する態度はかなりの程度，印象批評的である。

(17) 蔵原惟人「文化活動に関して」『前衛』1948年 第26号 63ページ この論文は戦後サークル運動に関する重要なものの一つである。

(18) 村山蟬吉「日本のうたごえ運動」『月刊社会教育』1966年11月号

(19) 昭和 28 年に誕生した千葉県四街道うたう会のある会員はこう書いている。「その頃，僕は非常に生活が苦しく，したがって世の中のこと，経済，政治についてほんとうのこと，正しいことを知りたいと一生懸命になっていた。そうした中でうたごえを通じいろいろな問題について，その原因とか，それが人々にどんな影響を与えるものであるかなど，自分の知りたいと思っていたことの一部を知ることができた。そして一週一度うたう会に行くことが何よりも楽しみであり，また前途に希望の光を与えた。近所の人や友人に来るように言ったが，なぜかだれでもそのよさは認めながら参加してこない」「僕たちのうたごえ」『農村のサークル活動』1956年 190—191ページ（傍点長浜）正しい，と知りつつも入会をためらうのはなぜかそれは合唱団綱領が正しくとも，民青団から独立しなければ急速な発展を望めなかっただろう，という推定と同じ次元の問題とは考えられないか。この問題は明らかに認識と組織の理論に関わっている。

(20) 村山惇「労働者，婦人の生活記録運動」『月刊社会教育』 1968年 3月号 96ページ

(21) この年に限ってみても出版された生活記録関係の本にはつぎのようなものがある。大関松太郎『山芋』（さがわみちお編著）・国分一太郎『新しい綴方教室』・長田新編『原爆の子』・宗像誠也，宮原誠一編『魂あいふれて』・今井誉次郎『帰らぬ教え子』

(22) 鶴見和子「生活記録の定義」『生活綴方事典』1958年 440ページ

(23) 鶴見和子 前掲 460ページ 生活記録に身を投じた女史は，理論を積み重ねるどころがそのカベに屈服して，早々にアメリカに旅立ってしまった。

(24) この会は「私の家」「あたらしい愛情」『母の歴史』などのすぐれた生活記録を残している。（木下順二・鶴見和子編『母の歴史』 河出新書 1956年として出版）

(25) 埼玉県騎西町種足青年読書会「生活をつづり合う『なかま』」『農村のサークル活動』1956年 66ページ

(26) この議論は主として生活綴方運動の中で展開された。私にとってこの議論もまた生活記録運動にブレーキをかけたという以外に評価のしようがない。率直にいって，それでは大衆の閉ざされ，屈折した価値意識をどういう方法で知るのか，と問うたなら反生活記録論者（＝反サークル主義論者）は具体的でかつ建設的な青写真を提起しうるのかおたずねしたいところである。

(27) 高木宏夫『日本の新興宗教』岩波新書 1959年 52ページ 「大人にとって必要なことは，当面している問題をどう解決するかであり，その相談相手を求めているのであるから，いわゆるクソリアリズムで自分の生活を長々と書きたて，それをめぐってどんぐりの背くらべの話し合いをしただけでは望んでいるような解決は出てこない」（同書 52ページ）（傍点長浜） 大衆を研究することで，大衆の未体系の価値・思想を蔑視するようになるのは，その研究の動機，方法に誤まりがあるからで，大衆の責任ではもちろんない。

(28) 沢井余志郎「生活を記録する会の運動」『文学』1959年 10月号 82ページ 氏はまた生活記録は文学かという議論については「『つづり方だったら誰にでも書ける。紡績女工だって書ける。文章のうまい下手を言わないのがいい』という，文学否定による出発であった」（同 78ページ）ときっぱり断言し，文学にかかわりあいはない，という姿勢は，運動を持続させるために必要なことであったと述べている。「真に万人に感動させる記録を生みだせ」という要求については「万人に感動を与えるために生活記録を書くことではなくサークルにとって，書き手たちにとって必要なことで書くわけであり，それらの中から，ときとして，万人を感動させる記録となるものが結果においてでてくることがあるということ」（同 82ページ）（傍点長浜）だと反論している。どうみても沢井氏の意見のほうが理にかなっている。

(29) 鶴見俊輔「大衆の思想——生活綴方・サークル運動——」『戦後日本の思想』 勁草書房 1966年 110—128ページ 初版は1956年だった。

(30) そのきっかけとなったのは加藤秀俊『中間文化論』平凡社 1957年であった。この他江藤淳「実感主義は人間的か」『中央公論』 1958年3月号・高見順「社会科学者への提言」『中央公論』1958年5月号・座談会「実感をどう発展させるか」『中央公論』7月号などがある。

(31) 前掲，座談会「実感をどう発展させるか」における江藤淳と大江健三郎の発言。「実感的な生活記録は，自己表現よりもむしろ抒情的な自己慰籍というか，自己憐憫の連続になる可能性が非常に強い」（同江藤淳の発言） そういう可能性は確かにある。しかし，この可能性の全く存在しない大衆運動はありえない。こうした文化・知識人と大衆との乖離は今日における大衆運動の挫折のかなり多くの比重を占めている。

(32) 堀田善衛「日本の知識人」岩波『現代思想』第11巻 1957年 178—179ページ こうしたいいかたは原爆被災者の取材を東京のホテルで酒を飲みながらやってのけたという話がもし本当であるとするならば，いよいよもって大衆に対して挑戦的である。

(33) 共同学習運動についてはつぎの文献を参照されたい。(1) 日本青年団協議会「あたらしい学習論のために」1968年（ここには共同学習論として重要な位置を占める『共同学習の本質』『勤労青年教育基本要項』『共同学習の前進のために』など価値ある論文，資料が収録されている）(2) 吉田昇他「青年の学習運動」農山漁村文化協会 1959年 (3) 日本青年団協議会「日本の青年」読売新聞社，日本青年館 1955〜59年 1〜6集 (4) 藤岡貞彦「昭和30年代社会教育学習理論の展開と帰結」『東大教育学部紀要』1969年 など。

(34) 拙稿「ふたたび青年サークルについて」『月刊社会教育』昭和42年6月号

(35) これはかなり譲歩しての話である。文化・知識人における実感主義はある面では大衆のそれよりはるかに激しい。彼らは自らの実感を侵害されない範囲で理論的である，といいかえてもよい。
北川隆吉はサークル活動の検討すべき課題として次の5点をあげている。(1) 一定の学習方法としてサークルを考えるか否 かの 問 題 (2) 組合とサークルの関係の整理 (3) サークル運動と思想的位置づけの問題 (4) サークルを小集団としてとらえ，それがもつ学習上，教育上の有効性，教育的技法としてとらえる場合の問題 (5) サークル運動の種別，内容別における問題。（「青年労働者」岩波『現代教育学』第16巻 1961年 190—191ページ） ここではっきり対比されるのは小集団論派はサークルの学習的側面の存否を問うているのに対して，小集団学習派は学習面をサークルの前提にしていることである。

(37) 千野陽一「青年学習集団のひろまりとふかまり」『青年の学習』国土社 1958年 304ページ

(38) 佐々木爽夫「サークル運動の歴史的な意味」『中央公論』1956年1月号 254ページ

(39) 宮原誠一「国民教育と小集団学習」日本社会教育学会編『小集団学習』国土社 1958年 15ページ 氏はまたつぎのようにサークルと学

習の関係について述べている。「サークルにおける学習の過程にこそ……国民の学力の秘密が口をあけている。社会科学を国民のものにするということが，情緒的な願いとしてではなく，日常的な実践の問題として，もっとも正直に断面をひらいてみせているのは，いわゆる学習サークルにおいてであるといってよい」（同 21 ページ）

(40) 宮原誠一「学習サークルの道」『月刊社会教育』 1960 年 8 月号（のち『青年期教育の創造』に所収）

(41) 宮原誠一「学習サークルから農民大学まで」『月刊社会教育』 1960 年 8 月号（『青年期教育の創造』所収 32—33 ページ）

(42) 藤岡貞彦「社会教育内容編成の基本的視点」福尾武彦編『都市化と社会教育』東洋館出版社 1969 年 152 ページ

(43) 「月刊社会教育」1967 年 10 月号 58 ページ

(44) 信濃生産大学の具体的な内容と展開は前掲(41)宮原論文の他，藤岡貞彦「生産大学・農民大学から労働大学へ」『月刊社会教育」1966 年 6•7 月号がある。

(45) 藤岡貞彦「勤労人民の自己教育をめぐる思想と状況」講座『現代民主主義教育』青木書店 1970 年 144 ページ　つまり先進的次元における理論の構築は，後進的次元を捨象しない限りにおいてその有効性を保ち得るのであって，大衆の土着の場としてのサークルはあくまでも学習の基本形態として粘り強く残存させなければならない。理論の純粋さを保つために，大衆の拠点の場であるサークルを後進的よどみとして，意図すると否とにかかわらず，切り捨ててはならない。

(46) たとえば軍歌を青年がうたうとき，そこに一種の解放感情，つまりなまの自己表現がみられる場合だってある。反戦フォークソングをうたいながら一方で軍歌をなんの抵抗もなくうたっている青年に出くわすことは決してまれではない。しかし，だからといってうたうことの自己表現を否定してしまえば，彼らのなまの自己表現の道をとざしてしまうこともありうるわけだ。サークルは動機や契機にとらわれず，なまの自己表現を科学的認識に結びあっていくための個性にあったプログラムをくめる。その意味でも，サークルは多種多様さを必然的に必要とする。

第 3 章　大衆の思想としての理論と構造

第 1 節　サークル理論の今日的吟味

日本的な土壌の中でその発生をみたサークルは，70 年代の国民の自己形成を展望する段階であらためてその歴史的，社会的位置を問われている。しかも特徴的なことは戦後サークル理論の主流をなした「対ファシズムとしての思想」や「新しい人間の結びつきとしての思想」派が姿を消し，戦前サークル理論の流れを汲む人々によってその問い返しが行なわれようとしていることである。

たとえば土井大助は「今日，日本におけるサークル運動の歴史をその出発点にさかのぼってふりかえることは，重要な意味をもっている。」すなわち「労働者階級のもっとも先進的な部分が，戦前にはじめたサークル運動と，今日のサークル運動とを，その発展としてみるか，異質なものとしてみるか」（傍点長浜）と述べて，[1] サークルの原点（＝戦前のサークル理論）に立ち返ることを主張したし，ごく最近には増岡敏和が「国家権力に抵抗し，大衆に依拠して文化の創造的発展をもたらせたプロレタリア文化運動」としてのサークル運動が「民主的な諸運動とのきりはなしの『理論』」によって誤まった方向をとっている。そのために新しい困難な状況（＝「停滞と後退」）が表面化していると指摘している。[2]

サークル運動が（量的）停滞を示し始めた昭和 34•5 年以降になると，それまでサークルを手放しで賞め讃えていた戦後サークル理論派はばったり口を閉ざしてしまう。「サークル運動が，当時の日本の大衆運動のなかで果した大きな役割，また将来果さなければならないさらに大きな役割を否定するものにたいしては，ぜんぜん承服しがたい」（傍点長浜）という勇ましい言葉や「1960 年の安保闘争の敗北以来，サークル活動をおしすすめてきた理念——しばしば情念の形をとってあらわれる理念——が何であったかを書きのこす仕事がなされる必要がある」[4] という形式的逃避的総括によって，自らのサークル理論の破綻をあくまでも認めようとせずに，いつのまにか彼らはサークル運動の前から姿を消してしまった。

こういう状況のもとで，サークル理論が変質し，歪曲していくのは避けられない。運動自体もそうした影響のあおりを受けないではいられなかった。「サークル活動の新しい役割」[5] を求める声には，まず理論における混乱と不正脈を根本にまでメスを入れてからのち，はじめて応えることができるであろう。

そこでただちに戦前のサークル理論にたち戻れ，というコースが正しい選択になるかというと必らずしもそうとはいえないところに今日のサークルの再検討の困難さがある。サークル運動を原点にひき戻して出発させるべきだ，という戦前サークル理論派には半分の真実と半分の誇張がある，といってよいと思う。なぜならこれらの人たちは，サークルの発生とサークル理論の発生とを混同してとらえているし，戦後のサークルの爆発的な広がりが，組合や政党から独立した時点で起っていることをみていないからである。組合や政党の下部組織あるいは単位組織としてサークルがそれなりの価値を認められるようになってきたことはすでに述べた。それはそれでよい。だが，問題はサークルが組合や政党の中にコミットすることですべてが解決したといえるかということだ。それはサークル運動の定着化＝固着化としてとらえることはできるが，発展，深化としてはとうていとらえることができないのではないかと思う。

サークルは大衆が生んだ思想であり，彼らの思想と行動の拠点である。これはくり返すまでもない自明のことである。戦前に前衛政党がサークル理論を提起したとき，大衆のサークルはすでに先行していた。極言すればサークル理論は大衆のサークル運動を自己陣営の勢力下におさめようとする濡れ手に泡式の発想から出たものであった。戦前サークル理論のそうした気配が大衆に敏感に伝わったからこそ，前衛政党によるサークル理論は大

衆から支持されなかった。支持したのはナップやコップの下にいた，いわば大衆の次元からみてサークルを必要としない人々であった。

そこで大衆の思想としてのサークルとは何か，という問いかけに答えることが，まず先決であろうと思う。結論風にいえば，それは「身を守る思想の具現形態」である。日本人の歴史の中で，大衆が登場してくるのは常に被抑圧者としであり，犠牲者としてである。さもなければ原子化され，砂のような，「甲羅のないカニ」としての無力な大衆としてしか認められない存在であった。第二次大戦が生み落した社会主義国における大衆は，日本とはまた異なった意味で，状況埋没的にならざるをえなくなっている。こうした今世紀における大衆の状況は，新たな大衆の誕生を全世界史的にまっているといってもよい。そういう文脈でサークルをとらえるならば，いずれの社会においても被支配者としていなければならない大衆の在りかたを根源から考えていくものとして位置づけることができるだろう。

組合・政党主義サークルが大衆の支持をうけなかったのは，大衆自身が歴史的存在としてではなく現実的存在の指標を選択しているからである。平たくいえばタテマエとホンネが大衆の中にはきっちり区分されて，つねにホンネを尊重し，体現していくのである。サークルを組合・政党勢力の指導下に置いて，自分たちの社会創造に役立てたいというタテマエを彼らは知っているのだが，腰を上げない。なぜか。そこにはサークルの内在，外在的問題よりも多くの問題がありすぎるからだ。組合の場合を少し例にとると，組合費が高すぎる，連日の如きカンパニア，休む間もない大衆動員，幹部への不信，もっともゲゼルシャフトなつきあい等々。人間が豊かになる要素よりも反対の要素が多すぎるというのである。階級的自覚のない大衆がホンネとしてとる行動は，組合は自分たちを守ってくれるかもしれないが，よくしてはくれないという水準のそれである。まして政党ともなると統一すべき理論と大衆が確信している度合の強いものほど分裂するという事例によって，政党もまた自分たちをよくしてくれないという認識をもつ。

サークル運動を革新的次元でみる楽天主義者は跡をたたないが，実際の話，サークルというのは保守でも革新でもない。いや，正確にいえば，サークルというのは保守，革新という偏向軸で見分けるべきではない。サークルはあらゆる状況に動的に対応しうる柔かさを持っている。だから保守とか革新とかレッテルを貼りつけることによってサークルを区分することはサークル本来の特徴をおしつぶすことになってしまう。サークルには右派から左派まで参加して自由にものをいいあう大衆の思想の拠点である。選択は彼ら自身が行なう。13年間も続いたという京都の民科哲学部会には大学教授，商社社員，タイピストなど実に多様な人々が参加しているが，このサークルがこれだけ長く持続したのは，ひとえにどんな思想であろうと，その発言の権利が保障されたからである。(6) 日本の大衆はそういう形で，もっとも原初的な形で身を守る方法を見つけだしたのではないか。いわばサークルにおける大衆の思想は，あらゆる組織論，運動論，認識論の間隙をぬって編みだされたものだったのであり，大衆が自らの歴史の中で初めて創造した自分たちの思想であったといえるであろう。

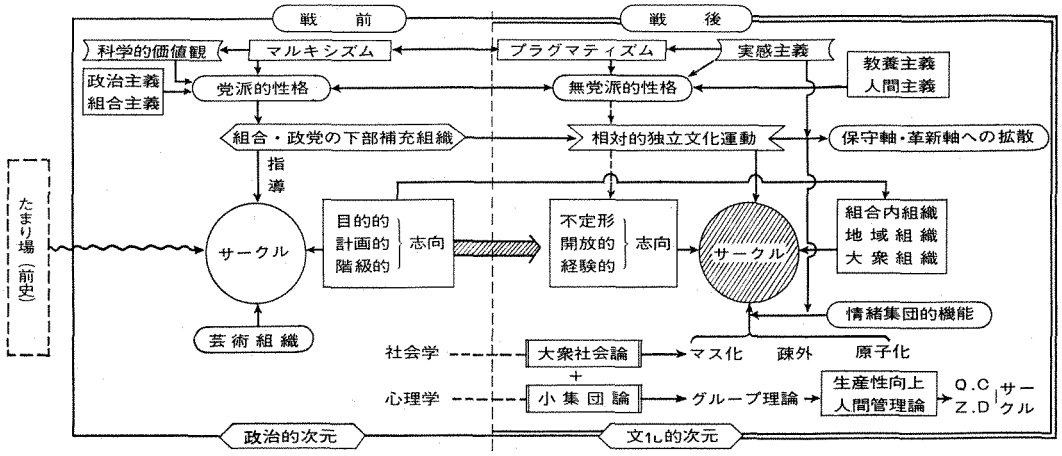
したがって，サークルを組織論にしろ運動論にしろ，それらの理論の中にとり入れようとする場合，こうしたプリミティヴな基盤を否定しては砂上楼閣を築くに等しい結果を招くことになる。それゆえ，サークル理論の今日的な吟味を，たちどころに戦前サークル理論に求めることはできない。(7) 戦前と戦後サークル論争が残していったものについての吟味からそれは始まる。

第2節　サークルにおける密着の論理

単純にプラグマティズムの影響を受けたサークル理論はだめだとか，マルキシズムのサークル理論は政党・組合のひきまわしに利するとかいう人がいるが，サークルというのはそのように竹を割るような簡単なものではない。ある面でこの二つの分類は若干の矛盾や不合理を衣下に押し込めてしまうのに都合のよいものであるかも知れないが，大衆の思想としてのサークルを一つのイズムで押し切ることはまずできない。大衆にその正しさが認められ，広汎な支持を受けたとき，サークル理論は一つのイズムに集約されるだろうが，今はそれを満たすものはどこにもない。とすれば，われわれもまた，既往理論のパーツをもってきて，今日のサークル理論の組立てを始める以外にないということになる。ベストではないが，現段階に見合った方法はこれしかないのである。

目的性や計画性の面で戦前のサークル理論が評価されているとすれば，戦後のサークル理論は運営面での功績が大きい，ということがいえると思う。換言すれば前者は巨視的であり，後者は微視的であったといってもよい。この二つの視座がお互いに補弼しあえば，サークルはかなり強力になりうる。しかし，わが国のイデオロギー党派における神経症的敵対の思想は，この両者の歩みよりを許すはずがなかった。しかし，ここでは両者の紛争を再現しようという無駄な努力をせずに，サークル理論の引き継ぐべきものに焦点を合わせなければならない。

第3図 サークルの系譜と構造



戦後サークル理論派は，サークルの中に日本の新らしいにない手をうみだす芽ばえがあると考えた。それは彼らのサークル観にはっきりとあらわれている。「庶民の生活感覚に裏うちされた民主主義の学校として，直接的には社会体制や対象(職場・地域・家など)のもつ非人間的・非民主的な面と対決しながら，民主主義を徹底して求めていくなかで，集団的ヒューマニズム(仲間の愛)をひとりひとりが実践としてうけとめ，豊かにしていく」[8]というサークルに関する概念規定に問題がないわけではないが，今はこの表現のうちの積極面を評価しておくことにしたい。サークルが一人一人のいのちを大切にし，一人一人の人間の尊厳をかけがえのないものとして考える，ということにすべての出発点がある。民主主義を徹底して追求することも，あるいはまたサークル本来の目的志向性を復興させることも，この原点を見落してはかなわないだろうからである。

それゆえにサークルが「無党無派であるうえに，そのイデオロギー的なハバが非常に広い」[9]という指摘を，いきりたって罵るようでは，いつもサークルは原点から一歩も進めまい。これまで見てきたとおり，サークルは決して一定の政党の指導によって生まれ，育てられたものではなかった。サークルが無党無派であるということと，無党無派であるべきだというのとでは全く話の方向が逆転するがここでは sein としての事実の指摘である。目くじらを立てる必要はない。それにしてもこのことが，正のモメントであるか，負のモメントであるかということの決着はここでつけておかなければならない。結論からいえばそれはプラス・シンボルである，正のモメントである。

無党無派とイデオロギー幅の広がりは，それだけを見れば明らかにマイナス・シンボルだ。こういう体質のサークルは多くの場合，長続きせず，無色透明で終ってしまう。もし，サークルの運動の軸に保守と革新の二つがあるとすればその殆んどが保守→保守，革新→保守というヴェクトルをとる。保守→革新という流動軸がないわけではないがまず発見されない。しかし，このことをもって無党無派サークルを否定するとすれば，サークル運動を大衆の手から引離し，かって見られた政党と組合の下部組織に位置づけてしまうことになる。その結果，サークルは，一部の人々の，サークルを必要としない部分のものに帰してしまうことになる。サークルが大衆の育てた唯一の(といってもよい)思想として生き続ける価値がある以上は，この特徴を踏みにじってはならない。

そういう文脈から「友の憂いに我は泣き」「どんなグチでも話しあおう」「一人の喜びはみんなの喜び」「手をつなごう肩をくもう」というサークル運動におけるスローガンをみるとすれば，これはサークルの原初的な機能を巧みに表現しているということができる。いわゆる face to face と大衆感情とが密着したかたちでサークルが運動していくことを示している。感情の面に限らず，サークルは大衆の生活[10]と密着している。

サークル運動の停滞が現われた折に，その原因は〝生活にあまりにも密着している〟ことにあるといわれたことがある。その主張の代表格である鶴見俊輔は，サークルが大衆の内面充実で果してきた役割は高く買うが，いつまでも生活のレベルだけ問題にしてきたため，大衆社会状況で役に立ないと述べている。[11]近代機構と大衆の生活実感の落差，常識主義的リアリズムの思考方法ではどうしようもないというのである。こうしたとらえかたは，これを鶴見的用語でいえば，明らかな「転向」である。それまでの氏のサークル理論の否定になっている。

サークルが大衆の中から芽ばえ育っていくためには常

識主義的リアリズムを尊重することが大切なのではなかったか。その意味で日高六郎が「密着戦術が100パーセント正しいとは考えないが，しかし正しくなくても，出発する地点はそこしかなかった」[12]と述べているのは，屈曲でもなんでもなく事実のとおりであった。大衆の広汎な組織としてサークル運動が位置づけられるためには生活のレベルを捨象する組織論や思想はまっさきに破棄されなければならない。「密着しようとすることが，すきまを発見する唯一の道」[13]であり，それは生活のレベルにサークルをおしとどめることを意味するものではない。「すきま」の発見が大衆を，実践のレベルから科学的認識に高める発条になるのである。

密着の論理は対ヒューマンリレーションの分野のみならず対イデオロギー中にも適応しうる。サークル運動が政党，組合内ユニットとして定着し，大衆組織化の力を弱めている段階でこのことは大きな意味をもつ。イデオロギー選択の幅が狭くなればなるほど，サークルは広汎な大衆を含んでゆく必要がある。右から左，浅さと深さその二本の軸が長く交錯するほど新しいサークルは独自の機能を発揮する。しかし密着の論理のみを過大視してはならない。それがサークルの「自然成長性」拝跪と「自主性自発性」の放任に結びつけられて停滞と行き詰まりに陥った苦い経験は是非克服しなければならない。[14]小集団ではだめで，サークルでなければならなかったところに，サークルのもつ固有の密着の論理があったのである。

第3節　自主性・独自性をめぐる論議

戦前サークル理論はプロレタリア階級の文化，芸術運動として大きな目的，明確な規約，堅固な組織をもつものであった。したがってそこでは前衛政党と労働組合の下部組織的な性格があらわれることになり，戦後サークル運動の混迷をもたらした政党・組合によるサークルひきまわしの遠因ともなった。

もっとも政党と組合によるサークルひきまわしのすべての責任をこれら戦前サークル理論派に向けるのは正しくない。蔵原惟人はすでに戦後まもなく次のように指摘している。

「文化サークルの他の大衆の文化組織は大衆の自主的な組織として，その自主性が重んじられなければならない。文化サークルを組合文化部の下部組織のように考えるのは誤りである。組合文化部は主として経済的経営的な面から文化サークルその他の活動を援助し，指導してゆくのであって，文化活動のための資金，資材，施設を政府や企業家から獲得したり，進歩的な文化団体と連絡して文化専門家を招聘したり，文化的な催しを主催したり，争議などの場合に文化サークルを動員して，それを助けたりするのが主な任務で，それを通じて文化活動を経済闘争，政治闘争と結びつけることができる」[15]

ここには，サークル運動の自主性がはっきりうたわれているばかりではなく，組合のサークルに対する原則までもが打出されている。これがその通り実践されていればサークル運動も無用な曲がり道を辿らなくともよかった。だから，戦後のサークル運動の政党・組合ひきまわし説を，あたかも戦前サークル理論のもっていた本質と結びつけることは間違いであるばかりか，故意にその真意を歪曲する態度だと批難されても仕方がない。[16]ひきまわし主義はむしろ理論的局面よりも，運動的局面から出てきた混乱であると思う。時間的にいえば，その期間はそう短くはない。潜在的には戦後サークル運動の出発時点から，とりわけ労働運動における幹部闘争時代からあっただろうと思われるが，それが顕在化したのは昭和28年以降のことである。サークルが組合幹部による労働者大衆の指導というルートで生みだされた場合と，労働者大衆による組合幹部への批判というルートで生みだされた場合とで，ひきまわしの度合も自ずから差異を生じたが，昭和30年前後にはサークルの自主性を尊重すべきだという雰囲気が大勢を占めるようになった。昭和29年国鉄労組文化部の「文教活動に関する方針（案）では，サークルは組合の事業ではなく，したがって，その自主的運営を守り，組合は当局の弾圧からサークルを守るべきことを明記している。そして同年の国鉄労組の方針として「組合の文教活動の根底となるものは，労働者が自主的に活動していくサークル活動である」ことがおり込まれることになった。[17]

一時的な混乱とはいえ，その中でサークルを守り育てていく実践主体は大変な辛酸をなめた。生活記録サークルをやっていた沢井余志郎の場合，[18]組合から分派活動をしているという名目でサークル解散を勧告される。理由をたずねると，「むつかしいことは解らん，本部へ行って聞いてくれ」といわれる。「サークルのほうが労働組合よりも労働運動をやっているほどすすんでいる」という自負をもつ氏は敢然とこの勧告をはねつける。外部との敵のみならず内部との敵にも遭遇しながら，この困難な状況をサークルの仲間と力を合わせて克服していくのであるが，その総括として沢井は，サークルの性格はこうした苦しいたたかいの期間につくられたといい，「サークルにとっての運動目標は，つぎつぎおきてくる弾圧に抵抗することであり，じぶんたちで目標を設定すると

いうより，会社や組合が目標をつくってくれた」[20]と述べている。

サークルが組合よりも強いという，こういうケースは希有だったいってよいかも知れない。組合の巨大な力の前に屈曲をよぎなくされたサークルも多かったはずである。昭和 30 年代以降における大衆社会論の横行にともなう消費文化の風潮はサークルに対しても「創造よりは鑑賞，鑑賞よりは娯楽へ」という悪影響を与えだしている。もし，この間に，サークル運動と組合との相互関係が整理されないとすれば，労働者にとって大打撃となるだろうことが誰の目にも明らかになりつつあった。組合活動に直接役立つか，あるいは闘争に直接役立つかぎりでしかサークルを認めないという考え方が，サークル運動の量と質の広まりと高まりによって打ちくだかれるのはもはや不可避的であった。各地のサークルで，各地の組合で積みあげられた議論[21]は結局，サークルの自主性と独自性を認めなければならないという方向で一致したのであった。そこでは(a)組合は経営者の圧迫からサークルを守らなくてはならない。(b)サークルの自主性を守るべきである。(c)組合はサークルの世話をできるだけやくようにする。(d)たとえ趣味一辺倒のサークルであっても組合は大切にしなければならない。組合が分裂したときお茶やお花のサークルに入っていた人たちはすべて第一組合にとどまったという経験がある。(e)サークル自身の自主性，民主性を保障しなくてはならない。(f)サークルのひとりよがりを正すよう努力する。(g)サークルに入っていない職場の大衆とのつながりを考えてゆくべきである，等々が指摘されている。

昭和 32 年に出された総評文教活動方針案では，今後の組合とサークルとの関係についてつぎのようなまとめを行なっている。[22]

(1) サークル活動が一般的な大衆活動の水準からぬけだし「質」が問題になってきた段階以後においては，サークル活動を文化活動として，組合活動と別な面があるということを理解し，各々のサークルの固有な機能について理解を深めることが必要である。その際，ただ単にサークルの質のみを問題とするのではなく，質的ひろがりを考えるべきである。

(2) サークルは組合が日本の民主主義勢力を支えていることを認めなくてはならない。サークルの発展もまたその同じ道すじをとるものであることの共通の理解をもたなくてはならない。

(3) サークルの発展のために専門家との結びつきを考えなくてはならない。

(4) サークル自体の幅広い横のつながり，サークル協議会の広汎な組織化をすすめていくべきである。

大要以上のとおりであるが，サークルの「質的ひろがり」の項は特に重要な提起と思う。サークル運動が，自主性と独自性を確立した時点から行き詰まり傾向を示しだすというのはまこに皮肉な現象であるが，反面，現段階のサークル運動の行き詰まりは一種の定着状況であって，自主性と独立性の浸透期における潜在活動期ともいえる。この期のサークル運動をそういう意味で停滞ととらえることは避けたい。

第 4 節　実感主義の克服

サークルにおける実感の問題についてはこれまで繰り返しふれてきた。実感を否定するのではなく，実感にとどまることの否定でなければならないこと，その上でサークルの外延をながめなければならないことをみてきた。しかし，実感を科学的認識にまで転化する経過についてはまだ手がつけられていない。サークルにおける実感主義の科学的認識への水路づけはいかに可能であるのか。いい変えればこの問題は大衆の意識変革の過程にも通じる大切な未解決の課題でもある。

実感から科学的認識へと高めるすじ道の例として，われわれは農業青年の学習サークルにその典型をみてきた。そこには先進的青年がおり，あるいは激烈に矛盾が露出している地域という条件のある所でのみ該当するものであった。ごく一般の大衆がのんびりいて，資本の矛盾が緩漫に浸透している地域，すなわち矛盾の無風地帯にこの図式の適用は不可能であった。われわれは，危機意識の発生しうる条件を備えた地盤の上でのみ役立つ公式だけしか持たなかったといってよい。これからは無風温和な，大衆のアパシー状態を生んでいる条件のもとで意識を変革する公式を持たねばならない。すなわち，実感の非実感的状況における大衆に適用しうる公式をもたなければなるまい。先進部分や優秀な実践の後ばかりを追い求めることによって，もっとも広汎な大衆に後進部分を拡げていっていることに気づいている人はあまりにも少ない。

実感は，アパシー状態の中にいる大衆にも備わっている。彼らのあらゆる認識のルートは実感という価値選択の門を必らずくぐり抜けて意識変革の不可欠な要素となっている。実感を科学的認識に転化させるうえで，いまひとつどうしても必要な要素は行為＝実践である。実感そのものは直接ないし間接的な行為に結合している。大衆はそれらの行為を媒介としながら科学的認識に実感を高めてゆくことができる。学習，調査，生活を綴る等はすぐれて科学的認識を支える力となる。しかし，逆に行

為そのものは主観的認識の強化ともなりうる。よく使われる表現でいえば革新的にも保守的にも，どちらにでも転化しうる弱さが実感＝行為の中に含まれている。そこに実感主義の克服しなければならない課題がある。大衆の意識変革の契機の問題として高木宏夫は「大衆の精神構造の諸契機の一つに石を投げこめば，それはそこにとどまらず，他の総ゆる面に波及してゆく。しかし，その波及の構造が明らかされ，波及の諸契機に即した具体的な対策をもっていないかぎり，認識の部分的な前進も全体としての価値判断においては思わぬ後退をもたらさぬものとはかぎらない」と述べ，やはり実感主義の克服を論じている[23]が，それでは実感主義をどう克服していくか。つぎにはこの問いに答えなければならない。恐らくこの解答をもっともよく引出し得るのは生活の実感性だろうと思う。ふたたび，われわれはそこに立ち戻って実感と科学的認識の両者を結ぶ接点を考えてみたい。

1. 人生雑誌

その第一の道すじは人生雑誌である。「若い広場」(昭和23年刊)「葦」(昭和24年)「人生手帖」(昭和27年)「青春の手帖」(昭和35年)などが代表的なものであるが，これら人生雑誌は，素朴な無名の青年大衆の支持によって人生体験の交流，逆境克服の精神的支柱となっていた。青年大衆の孤独と不安，苦悩と歓喜をこれら人生雑誌は正面から取上げていった。すぐれた青年がまっすぐ社会矛盾にぶつかっていくのとがって，人生雑誌の読者たちは，おくれてきた青年たちであったといってもよい。

人生雑誌の功績は，危機意識や社会意識の育たない後進的部分の青年大衆の実感軸を中心にして吸収し，これを悩みのたまり場に終らせることなく，危機意識にまで自然に転化させる機能を部分的にではあるが果したことである。もちろん，人生雑誌は営利事業であるから，すべての点にプラスの面をみることはできない。いろいろな批判があるのは当然である。[24]

人生雑誌が掘りあげた鉱脈は全部が全部，主体性をもち社会矛盾に立ち向かうものばかりだったわけではない。しかし素朴な青年大衆に広汎に指標を提示しえた事実はやはり正当に評価さるべきであろう。事実に即していうと，「葦」は昭和24年に発刊して以来着実に発行部数を伸ばし，この雑誌の読者たちが全国各地でサークルをつくりはじめる。これらのサークルの要求にこたえる形で起草された「葦会宣言」は(第3表参照)直情的ながら青年大衆の心を広くとらえたのであった。この宣言はしかしながらかなり観念的で「庶民主義」「平和主義」「社会科学的」という用語の羅列が目立つ。「葦」は3万部を最高に次第に減少していったが，昭和27年1月に創刊号を出した「人生手帖」は，読者の自主的サークル「緑の会」を中心に，8万部の発行をみている。「人生手帖」は，山びこ学校の基本精神である6つの誓い[25]を思い出させる「緑のちかい」をかかげて，サークルの指針とした。(第4表参照) 葦会宣言と比べて，緑のちかいは，万人向きとでもいえそうな内容をもっている。これを「会員を統一する綱領」[26]ととらえる人もいるが，現場の青年たちはそういうふうにはとらえていなかった。むしろ信条，思想，境遇のちがいをこえた統一と団結のための指標として受取っている。広汎な青年大衆を一つの地点に結集するためには，最初から闘争的，政治的スローガンを掲げてもおいそれとはうまくゆかない。葦会がそれを示しているし，かなり目的や性格を明らかにしている「わかもの会」でも，「握手，仲よくしましょう」のスローガンで出発する。[27]問題は万人に共通する課題，実践が次の段階でどう展開していくのか，ということである。

第3表 葦会宣言

1. 吾々はいかなる特権意識をもみとめない事にしようではないか。
2. 吾々はあくまでも人類の平等観の上に立ってものを言おうではないか。
3. 吾々はてっていせる庶民主義の中に，いきがいを感じようではないか。
4. 吾々は社会科学的にものを考えようではないか。
5. 吾々は人類社会の進化を信じ，これをボウガイするものとユウカンにたたかおうではないか。
6. 吾々は人種的へん見をもたない，てっていせる平和主義者になろうではないか。

第4表 緑のちかい

1. 人間としての道理に合うことか合わないことかを考え方と生き方の基本にしよう。
2. 正しいことも，実行しなければ意味がないのだから，言行一致＝理論と実践の統一を生活の信条にしよう。
3. うぬぼれてえらそうなことを言ったり，ひがんで無口にならず，素直な自信をもって生きよう。
4. ひとりで悩んだり苦しんだりしないで，みんなと話し合い，考え合って，よりよく生きる道をみつけよう。
5. 働くことにほこりをもち，働きがいのある社会をつくるためにみんなで協力してゆこう。

緑の会の基本的性格を現わすものとして『サークル運動』という本が出ている。ここには「サークル運動の意義」「緑の会のサークル運動」「サークル運動の問題点」「地域社会の結びつき」等について詳細な解説がある。それは緑のちかいの具体的説明といってもよいが，出発点と到達点[28]に重点がかけられ，その　の過程には言及されていない。つまり，実感→行為→統一戦線への集結は語られるが，行為主体である意識変革の方法については，集団による自然成長性に頼るという結果になっている。

人生雑誌は矛盾の無風地帯(＝実感の非実感状況)における青年大衆の実感を大切にしながら，読む，書く，話

すという方法を通じて，多くの青年を吸引したが，実感主義克服の具体的方策としては集団の自然成長性にまったために，すぐれた集団化の成功した場合の科学的認識化への成功のケースと，あくまでも実感主義から離れることができずに終ってしまうケースとの明確な落差を残すことになった。

2. 婦人の自己形成

第二の道すじは，やはり「書く」ことから始まった婦人大衆の例に求められる。昭和30年6月，朝日新聞の婦人投書欄「ひととき」の読者を中心としたサークル「草の実」が生まれた。ここに登場する婦人達を〝投書人」と揶揄する風潮もあったが，その婦人たちの多くは「ゆうべ遅く，家じゅうが寝しずまってから，納戸の暗い電灯の下で書いたのです。田舎では，女がものを書くなどということは，それこそとんでもないことなのです。そして夜明けをまって，となり村のポストに入れにいってきたのです。べつに，たいしたことを書いたのではありません。農村からのたよりのつもりで書いたのです。女の私が封書をポストに入れたりすると，女のくせにどこに手紙を書くのだと人にいわれるのです」[30]と訴えねばならなかった人たちであった。その趣意書はつぎのようにうたっている。

私どもが日ごろ考えること，社会，政治経済，教育文化，その他さまざまのことについて，私どもの生活に根ざしての希いは数限りなく，ここ三年あまり，朝日新聞〝ひととき欄〟に載せられてきた婦人の声は日々に私どもの心にひびきます。そんな心が通いあうことによって，おのおのの生活のはげましとし，家庭を幸せに，社会をもっと住みよくするなんらかの力ともなればと希って生まれたのが草の実会です。それは行動の華やかさを競うのではなく，どこの日かげの道ばたにも種を落して根強く実をつけてゆく，地味で堅実な集りでありたいと希い，各地でグループごとにあつまって一人で考えていてはどうにもならないことをみんなで話しあい考えあってゆきたいと思います。(傍点長浜)

ここにみられるのはプラグマティズムの模範的なサークルの思想である。この趣意書でみる限り，「ひととき」

第5表　草の実会における実践の歩み

年	婦人・一般	草の実
1955 (昭31)	• 第1回日本母親大会 • 国民文化会議	• 草の実会第1回総会
1956 (昭31)	• 第1回部落解放全国婦人集会 • 第1回働く婦人の中央集会	• 母親大会参加は会としては保留に決定
1957 (昭32)	• 砂川基地斗争「心にクイは打たれない」 • 勤評反対斗争	• 母親大会に正式参加 • 原水禁大会正式参加見合わせる
1958 (昭33)	• 官制「母親大会」日本母親大会への圧迫強化 • 警職法反対斗争 • 人権を守る婦人協議会結成	• 母親大会連絡会に常任委員送りだす • 原水禁大会に正式参加 • 警職法反対「母と娘の大行進」に参加
1959 (昭34)	• 安保改定阻止国民会議 • 安保改定反対「母と娘の大行進」(30余団体，1,000人)	• 社会教育法改正反対で国会に陳情 • 安保改定阻止国民会議結成大会参加 • 参議院予算委員会公聴会に公述人として出席 • 安保改定反対「母と娘の大行進」に参加
1960 (昭35)	• 『世界』5月号特集「沈黙は許されるか」 • 岸首相「声なき声」発言 • 樺美智子の死 • 新安保条約発効	• 人権を守る婦人協議会に委員を送る • 子供連れでパラソルデモ • 安保強行採決に対する抗議行動に参加 • 国民年金問題で，厚生大臣と会談
1961 (昭36)	• 右翼による出版・文化人テロ • 政治暴力行為防止法反対運動	• 国民文化会議に参加
1962 (昭37)	• 日本婦人会議結成 • 新日本婦人の会結成	• 高校増設集会に各地で参加 • 日韓会談反対婦人集会参加
1963 (昭38)	• 第9回原水禁世界大会分裂 • 第1回部落問題研究全国集会	• 都政をよくする婦人懇談会に参加 • 不当課税と高物価に反対する国民集会に参加 • 文集「戦争と私」を出版
1964 (昭39)	• 第9回働く婦人の中央集会分裂	• 「草の実会十年の記録」を出版 • 消費者米価値上げ反対声明 • 生活を守る婦人集会に参加
1965 (昭40)	• 期待される人間像 • 三矢作戦暴露される • 原水爆禁止国民会議(原水禁)結成 • ベトナムに平和を／　ベ平連	• 「ベトナムの問題はベトナムに」声明書をアメリカ大使館に送る • 文集「喜びも哀しみも——戦後と私」出版 • 公共料金，物価値上がりについて関係大臣に面会，抗議

婦人は実感のレベルでもの見，判断し，行動するはずであった。しかし，草の実は完全とまではゆかなくとも，かなりの程度，実感主義を克服し，科学的認識のレベルに到達したのであった。彼女たちの取組んだ実践の過程は大衆運動参加の歴史であったといってもよい。(第5表参照) 昭和30年代は大衆運動の時代であったといってもよいほど，多様な大衆運動が盛りあがっている。第1回日本母親大会の「もはや私たちは，ひとりびとりばらばらの，弱い女ではありません。私たちはどこにあっても，日本母親大会の名において，勇気をもちあいましょう」いう大会宣言は，「泣きながら訴えるお母さん，泣きながらそれに聴き入るお母さん」の力強い連帯と団結の結晶であった。「涙と訴えのあらし」と形容されたこの母親大会は，実感のレベルを基調にもっていたけれども，可視的に「社会認識の発展過程」[31]を内在的に含むものであった。

たとえば母親大会をアカよばわりする非難に対して草の実会員の一人はすぐさま反論して「真に子供の幸福を願う母親の気持に，赤とか白とかのちがいがあるだろうか。そんなことがあるはずがない。……また真の平和を願う気持を，そんなことで，はぐらかしてはいけない」[32]と反動勢力に怒りの声をぶちまけた。母親運動の出発点は第2回大会のスローガンとなった「生命を生み出す母親は，生命を育て，生命を守ることを望みます。」を常に原点とするものであった。しかし，分裂後の母親大会が辿る道すじは原点と切断したものとなり，広汎な婦人大衆から遊離していくことになる。

草の実会の歩みの特徴は一会員のつぎの発言の中に端的に示されている。「私たちはノロノロと歩みますが，決して後へもどることはありません。労働組合の方もすぐに手を握ろうなどと性急なことをいわないでみまもっていて下さい。お母さん方はすぐに手をつなごうなどといわれるとかえっておどろいてしまいます。しかし労働組合の方々をたよりにしていることはたしかですから，ぜひノロノロした歩みでもゆっくりみまもって下さい」[33]すなわち，納得したうえで自己の歩みだす足跡を確認する慎重さが，このサークルを支えていたといえる。

草の実会の歩みにそのことが如実にあらわれている。

第6表 草の実会における第三回学習講座学習計画（室俊司『戦後日本婦人の自己形成』より）

学習のテーマ	学習の目標	学習の要点	学習の内容	備考
1. 戦後のうごき	○大衆運動のひろまりとふかまりの時期をたしかめる	○大衆運動の担い手はどうなってきているか。 ○新しい活動家の誕生とはなにか	○戦後史の概観，とくに昭和30，35年の時点 ○レポート「私の戦後生活」	○草の実会誕生の意味
2. アメリカン・デモクラシーと朝鮮戦争	○いわゆる「自由主義」の限界と，平和運動へのとりくみに注目する	○戦後初期の啓蒙運動は，なぜ挫折したか ○資本主義と社会主義の対立—昭和25年と現在ではどうか ○いわゆる新教育への反省とはなにか	○戦後初期の活動家たちのうごき ○第一次と第二次のミッション・レポート ○コア・カリキュラム	○朝鮮戦争の頃，私たちはなにを考えていたか
3. 憲法と私たち	○憲法意識の観念から現実への移行は，何によってもたらされたかを考える	○国民の憲法意識を，第9条だけでみるべきか ○生きる権利と憲法との関係はどうか	○戦争体験と憲法意識との関係 ○社会保障—「朝日訴訟」「国民年金」「保障所づくり」，「高校全入」をめぐるうごき	○「明るい社会」とは
4. 昭和30年という年	○日本独占資本の高度化への準備が完了したことに注目する	○この時期に大衆運動がひろがりはじめたが，対決すべきものは巨大化，複雑化してきていることを，どう考えるか	○鉄鋼産業の成長過程 ○第1回母親大会，第1回青研集会での問題	○「明るい社会」とは
5. 話し合いと生活記録の有効性	○いわゆる「学習」ということの意味を考える	○さまざまな現象から本質を摑む方法として検討すべき問題点はなにか ○社会科学の必要をどう考える	○話し合い学習，生活記録運動のひろがりと停滞 ○「経済学教科書」学習の反省 ○学習と実践との関係	○「草の実的」とは
6. 大衆運動と活動家の心	○大衆運動における活動家の信念をたしかめる	○大衆運動と政治運動の関係「筋を通す」ということをどう考えるか ○自分はなんで活動しようとしているのか	○戦後の大衆運動における挫折の問題 ○原水禁運動のひろがりと混迷 ○宮本百合子と亀井勝一郎の考え方	○「草の実的」とは ○六集「戦争と私」のあとにくるもの

母親大会，原水禁大会に正式参加を決めるのは，いったん態度を保留して後であり，大衆運動の分裂時代（昭和37年以降）に入ると，身近かな問題に取り組んで，自分たちの運動の再評価（＝文集の発行）を行なうといった具合である。わからなければ動かないという草の実会独特の歩みが，特に注目されるのは，その段階から各種の運動体験を経て，わからなければ動けないというふうに変ることである。わからなければならないことを知るためには，知らなければならない。そのために婦人たちは学習会「人間のあゆみ」を誕生（昭和35年11月）させる。第Ⅰ期「サークル・生活記録」第Ⅱ期「石川啄木のあゆんだ道」第Ⅲ期「戦後と婦人たち」が各テーマとして取りあげられた。（第Ⅲ期については第6表参照）草の実会に直接協力してきた室俊司は，この学習を通じて社会認識を高めていった一主婦の例を，「まだ多分に感覚的だが」と断わりつつ，手記の中から紹介している。[84]

「夜のアルバイトから帰った息子が，テレビにうつるベトナムの若者の姿をみて私にいいます。『憲法第九条があって安心でしょう，お母さん。』私がいま心から願うのは，平和な，戦争のない生活です。どんな理由であれ，戦争はいやです。草の実会に入りさらに『人間のあゆみ』の勉強会に出席して，自分の身のまわりの出来事が，国の政治と深い関係のあるのをいまさらながら知りました。母親大会のスローガン『生命を生みだす母親は，生命を育て守ることをのぞみます』私はこの言葉がすきです。この言葉の中に，東京空襲の日に死んだ母の願いと，私の願いがあります。」

大衆運動とサークルとの結合を草の実会はよく果たしてきた。その過程のなかで矛盾の無風地帯にいる大衆も，母親としての願いを公約数として実感のレベルを科学的認識のレベルに高めることを知ったのであった。しかし，この期の後半になってからの大衆運動の分裂はまたふたたび婦人大衆を実感主義におし戻す危機さえはらんでいる。大衆における実感主義の克服は新たな状況に遭遇しているといってよい。

むすび

一時，サークルは人間性回復の場としてもてはやされた時期がある。サークルを無条件に礼讃する人々は今もってサークルの本質を人間性回復の場のみに求めている。人間性の回復，それは現代に生きる労働者階級すべての切実な願いであり，要求である。そうであるだけ労働者の広汎な労働運動への結集の要請も自然な帰結として考えられるのである。にもかかわらずサークル運動は必らずしも労働運動と軌道を一にしているとはいえない。そのことは一面でサークルの人間性回復論の個人主義への還元，他面で文化主義への傾斜というようなマイナスの軌跡を描かせる結果になった。人間性回復という意味をサークル的に理解するとすればそれは主として解放の理論であるよりも成員相互の意志交流の別な表現であった。いわゆる人間相互の充分なコミュニケーションの重視は，サークルを自分だけ満たせばそれでよしとする機能主義に転化させる要因を多分に持たせることになった。

サークルについて私は過大な評価を与えているのかも知れない。さらにまた一般大衆について私は過大な期待をかけすぎているのかも知れない。サークルを真向から否定する大胆な人はあまりいないが，消極的評価しかしないという範囲の人々は多勢いる。そのことについてとやかくいっても仕方がないと思う。それよりも，うたごえ運動を否定し，生活記録運動を非難しながら，大衆々々と拝跪する思想風潮が未だ根強いということによる大衆の思想形成上の障害をあらためて問い返さなければならないように私には思われる。

小稿では，大衆という言葉を中心概念に据えてきたが，大衆そのものの定義づけをすることをしてこなかった。敢えていえばその必要を認めなかったからだといってもよい。定義づけ，枠づけによってその核心が明らかにされるものがあることはまぎれもない事実であるが，大衆という幅と内容に多様多層な構造をもつものを，強引にまとめることは不可能である。とはいっても，大衆に関する理論の確定が不可能という意味ではなく，その作業は別に取組まれなければならない，ということである。それには充分な資料の検討と分析が必要とされる後の作業にまつほかない。

レーニンは「大衆の真の教育は，大衆自身の自主的な政治闘争，とくに革命的闘争とはなれて，そのそとでおこなえるものではけっしてない。闘争がはじめて，被搾取者を教育する。闘争がはじめて，彼らに彼らの力の限度を示し，彼らの視野を広め，彼らの能力を高め，彼らの知力を啓発し，彼らの意志を鍛えるのでる」[85]と述べている。もとよりこうしたブリリアントな大衆教育方法に異論のあるはずがない。しかし，私がこの研究を通して見つめたかったのは，大衆の自己形成をわれわれが理念としてどうとらえるべきなのか，という点であった。それが成功したとは到底思わないが，小稿はその序説の第一項をめざしたにすぎない。サークルと大衆との位置づけを目指した結果，運動論ないしは集団論ともいうべき部分は後に残される課題となった。

また大衆社会と大衆運動との関連も当然，構想の中に入っていたが，それはさきにも述べた理由から故意に欠落させた部分である。私にとって大衆社会→アノミー状況→自己疎外→サークルというサイクルは承服しがたい図式である。大衆社会論における大衆は一貫して非階級的存在としてとらえられており，それゆえ大衆の創造の場，自己形成の拠点としてのサークル発生を否定する形になっている。大衆運動に関しては述べるに足るだけの資料をまだ把握していないという単純な理由で取上げていない。しかし，それらは大衆概念の確定を目指す際に不可避の関門となるであろう。

サークルに関して，小稿で述べてきたことはそのようなわけで語るべきごくごく一部にしか当らない。大衆における生活実感と科学的認識を結ぶ媒介原理についてはまだまだケース・スタディの段階であり，これからサークル個々のモノグラフ・リサーチを深めていかなければならないであろうし，戦前・戦後における文化史に占めるサークルの文化創造の足跡も辿ってみる必要がある。その中で，サークルが大衆の日常性とどうかかわってきたのかということを検証してみたい。さらにまた大衆の思想という言葉を小稿ではかなり無雑作に使ってきたが，そのほんとうの中味を吟味することも大切なことである。知識人の思想は内在したが，大衆の思想はそれではどんな意味をもち，どんな位置を占め，いかなる構造をもっているのか。そして，忘れてならない最大の関心は，国民の自己形成とは何か，国民の学習とは何か。それとサークルとはどういう関わりをもつのかという社会教育的課題への取組み等々である。

社会教育といえば，わが国では通常，社会教育行政の枠の中で行われている組織的教育活動をさしている。そのことはともすれば社会教育行政のしていることだけが社会教育であるというように曲解されやすい。社会教育の学習主体が国民に存するという自明のことが，そういう理解のしかたからは生まれにくい。したがってサークルは社会教育の対象外だと考える社会教育職員が未だにいるし，いっぽうサークル活動家の多くには，頭から行政のヒモつき援助を断わったほうがよい[36]と考えていたりするようなくいちがいが生まれる。

大衆の学習要求が多様になっていくにつれて，ますます大衆の学習形態も分化していく。それをこれまでの社会教育行政で満たすことは困難になってきつつある。「間にあわない」[37]社会教育でなくなるために，大衆の要求に根ざし，彼らの主体性と自主性そして個性を尊重するサークルは，これからの大衆の自己形成の根幹をなすものであることは既に疑う余地がないのではあるまいか。

〈註〉

(1) 土井大助「文化サークル運動について」『文化評論』1968年9月号 40, 42ページ また氏はつぎのようにもいっている。「労働者の自主的なサークル運動にたいする反動的な中傷・攻撃の議論には，かならずサークルの歴史にかんする故意の歪曲がふくまれているし，それはその出発点に例外なく言及されている。こうした攻勢にたいして受動的なサークル運動理論にほとんど例外なく示されているのは，サークルの歴史をその出発点において正しくとらえていない一面的な理解である」(同 40ページ)

(2) 増岡敏和『サークル運動入門』東邦出版社 1969年 著者まえがき

(3) 日高六郎「大衆論の周辺」『民話』1959年 3•4月号 (のち『現代イデオロギー』勁草書房 1960年に所収 514ページ)

(4) 鶴見俊輔「サークルと学問」『思想』1963年1月号 56ページ(のち『日常的思想の可能性』筑摩書房 1967年所収 142ページ) 氏の場合，この思想は『思想の科学』における実践へと移行するが，それが内在的，外延的に問題をもっていることは周知のとおりである。

(5) 福尾武彦「社会教育と大衆運動」『都市化と社会教育』東洋館出版社 1969年 171ページ

(6) 小松摂郎「民科哲学部会は生きている」『思想の科学』1959年7月号「研究会にとっては自由に物が言えるような雰囲気を作ることが必要である。哲学部会では『僕は革命はきらいだ』などと言った人がいたがそういうことまで言える雰囲気があってはじめて本当の討議ができる。」(同 66ページ)

(7) しかし，私が戦前サークル理論への復興を是としないのは「はげしい社会変化のただ中にある，今日の日本の新しい集団は……複雑な形をとっている……。このとき，初期のサークル活動の理論によって現状を認識しようとすることは有効ではない」(永井道雄「新しい集団の形成」講座『社会学』第7巻 東大出版会 1957年 149ページ) という理由からではない。そのことは随処で述べた。

(8) 高田佳利「サークルの定義」『生活綴方事典』明治図書 1958年 447ページ

(9) 日高六郎 (3) 同掲書 514ページ なお，無党派に関する論文として篠原一「大衆運動と無党派活動家」『思想』1960年9月号がある。

(10) 最近，「生活」という言葉は抽象的なので「実生活」という言葉が使われ出しているが，奇怪なことだ。元来使われた意味での純粋性をその言語に求めることは困難であるが「生活」という言葉は少なくとも国有の性格を付与された特殊な言語である。自らマニキュアを施す必要はない。このことについては柳田国男「毎日の言葉」定本『柳田国男集』第19巻 筑摩書房 1969年 399ページ以下を参照されたい。

(11) この指摘は「思想の科学研究会1959年度総会報告」でなされている。同誌 1959年12月号『サークル論をめぐる討議から』参照

(12) 日高六郎 (3) 同掲書 514ページ

(13) 谷川雁「工作者の論理」『思想の科学』1959年1月号 18ページ

(14) 三浦つとむ「サークル」『大衆組織の理論』勁草書房 1959年「プラグマチストその他サークル理論を説く人たちが，自然成長性の克服をよびかけるどころか自然成長性を拝跪し，欠陥を美徳に祭りあげ，大きな理想・大きな目的の線を貫く中での自主性自発性の尊重ではなくて，何でも勝手にやりたいことをやる自主性自発性を讃美してこれにおしとどめておいた…」(119ページ)

(15) 蔵原惟人「文化活動に関して」『前衛』1948年第26号70—71ページ

(16) たとえば先崎金明はさきの蔵原の見解に対して「少なくともことばの上ではサークルの政治的任務にふれないで文化的任務だけを強調し，自由性を尊重して統制主義を否定し，さらに補助組織論まで捨てたことは明らかにナツプの否定です。これはナツプにメスを入れないで，裏口から戦後の状況にあわない部分をこっそりなげ捨てたと見ることができます」(『サークル活動の方向』 三一新書 1962年 19ページ) と述べているが，主観的にどう判断するかは著者の自由だが，客観的には首肯できない。

(17) 那須野隆一「戦後労働者教育運動の推移」『教育史』東洋経済新報社 1963年 356—357ページ

(18) 沢井余志郎「生活を記録する会の運動」『思想』1959年10月号 なお，氏の個人的サークル体験としての一文「あたりまえの青年労働者」講座『日本の社会教育』 第3巻 (青年教育) 生活科学調査会 1961年も参照されたい。

(19) たとえば，氏のサークルは，寄宿舎増築要求／という運動を「何畳に何人いて，押入はいくつ，ふとんをひくと重なりあってしまう，歩くすきまもない」式の生活記録ですすめる。誰が読んでも，これは何とかしなくてはならないようなひどい実態を，経営者のノド元

につき立てる効果をあげた。組合よりもサークルに対する弾圧が強まるのは必然だったがそれだけサークルは強い力を発揮した。

(20) 沢井余志郎 (18) 同掲書 80 ページ

(21) 詳細は割愛するが，斉藤伸編『職場のサークル活動』三一新書 1961 年 134 ページ 以下を参照されたい。

(22) 日本労働組合総評議会『これからの文化活動』三一新書 1957 年 220—221 ページ

(23) 高木宏夫「日本の大衆の人生問題——価値変革への契機をどうとらえるか——」『思想』1959 年 11 月号 69 ページ　氏はその具体的対策として日本の諺における矛盾の科学化を主張する。たとえば「『虎穴に入らずんば虎児を得ず』が極左冒険主義を合理化するものにならないように，また『君子危きに近よらず』が日和見主義を合理化するものにならないように」(同 70 ページ) 大衆の価値変革をはかるべきだという。

(24) 批判の代表的なものにつぎのような意見であろう。「人生雑誌の内容的中心は，相も変らず，私的な『身上吐露』形式であって主観的な慰め合いに終り，そこからは積極的な未来像建設への意欲がでてこない。またマルクス主義と尊徳主義の折衷形式を編集方針とする最近の『人生手帖』は現代青年の意欲に逆行する勤・倹を主張しさえしている」(布川清司・野崎務・遠島満宗「人生雑誌の運動をになうもの」『思想の科学』1963 年 11 月号 19 ページ) マルクス主義と尊徳主義の折衷云々は寺島文夫の『二宮尊徳』など一連の著作を指しているが，布川の指摘したとおり寺島の最近の著作は『二宮尊徳』をひもとくまでもなく非階級的観念的世界に青年をいざなう傾向を示している。

(25) ○…いつも力を合わせていこう
○…かげでこそこそしないでいこう
○…いいことを進んで実行しよう
○…働くことが一番すきになろう
○…何でも，なぜ？　と考える人になろう
○…いつでも，もっといい方法がないかさがそう

(26) しまいっぺい『仲間づくりの喜び』グラフわかもの社 1965 年 91 ページ

(27) にしむらひろし「京都わかもの会の運動」『月刊社会教育』1962 年 8 月号「萎縮していく青年の若ものらしさを存分に爆発させ，遊びを通じて仲間づくりをすること…」(同 40 ページ)

(28) 「民族としての独立を奪われ，米国の原水爆実験の放射能灰をあびせられつつある日本国民は，今こそ自ら自由に生きる道をもとめてふるい立つべきである。その民族の隊列の中に，われわれも自信をもって，生命と平和の象徴である緑の旗を高くかかげて進もう…」(寺島文夫『サークル運動』(文理書院 1967 年版 226 ページ)

(29) 寺島がサークルは身近かな問題，たとえば時間を守る，公共道徳を守るといったようなことを大切にすべきだと述べたことを，こういう考え方はサークルを「ケチな時点」にとどめるものだと批判した増岡 (註 (2) 119 ページ) の間のくい違いは論争というにはあまりにも低い次元にある。

(30) 影山三郎『新聞投書論』現代ジャーナリズム出版会 1968 年 232—233 ページの部分より重引「ひととき」はわが国新聞史上初の女性投書欄として朝日新聞に昭和 26 年 10 月うまれている。

(31) 室俊司「家庭婦人の社会認識とその変容過程」『婦人の学習』東洋館出版社 1967 年

(32) 朝日新聞 1965 年 6 月 15 日付「ひととき欄」

(33) 国民文化全国集会での発言　総評編「これからの文化活動」三一新書 1957 年 146—147 ページ

(34) 室俊司「戦後日本婦人の自己形成」『戦後日本国民の自己形成』国民教育研究所 1967 年 170—171 ページ 室のこの論稿は戦後日本婦人の社会認識の発展過程をみごとにとらえている。

(35) レーニン「1905 年の革命についての講演」『レーニン 10 巻選集』大月書店 1969 年 139 ページ

(36) だから，青年たちが学習サークルをつくって，いろいろプログラムやチューターについて相談をもちかける際に，労学協は知っていても社会教育課をたずねるということを知らないという例がよくある。

(37) 社全協運営委員会「社会教育研究全国集会この 10 年」『月刊社会教育』1970 年 8 月号 73 ページ　かっては「ごった煮」の社会教育といわれ (1950 年代)，いまは「間にあわない」社会教育といわれる。この 20 年間の社会教育の歩みはその程度であったともいいうるわけである。民衆の精神支配を意図する権力の側から，社会教育はたしかに遅れをとっている。つまり後手後手の社会教育である。サークルは後手から先手をとりうる身軽さをもっている。このことに私はサークルの今日的意義をとくに見出している。